

大阪市平野区

# 加美正覚寺遺跡発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所







大阪市平野区

# 加美正覚寺遺跡発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所













飛鳥～奈良時代の遺構群(西から)



大阪市平野区

# 加美正覚寺遺跡発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会  
大阪文化財研究所





## 序 文

本書は2010年に行った加美正覚寺遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであり、同遺跡では初めての報告書となる。

調査では、これまでまったく知られていなかった、古墳時代中期末、飛鳥～奈良時代の集落が発見された。また、中世に遡る可能性が高い、珍しい掘上げ田の事例を明らかにすることができた。「正覚寺合戦」として全国的にその名が知られる当地域の歴史を約千年も遡る成果が得られたことになる。調査地は旧正覚寺村から北東に離れ、中世までは集落の周縁であった。しかしながら、古代以前には異なる景観があり、遺跡のさらに中央に近い部分には、戦国時代と同様に濃密な歴史が埋もれていることを予測させる。これまで調査の機会に恵まれなかったが、今回の成果はこの地域の新たな歴史を紐解く契機となるだろう。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多大なご理解とご協力を賜った大阪市都市整備局をはじめとする関係各位に、心より御礼を申し上げます。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会  
大阪文化財研究所  
所 長 長 山 雅 一



## 例 言

- 一、本書は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が、2010年度、平野区加美正覚寺三丁目において実施した発掘調査(KM10-3次、加美正覚寺遺跡の遺跡名はKMで示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長 南秀雄の指揮のもと、主として長原調査事務所副所長(現難波宮調査事務所副所長)岡村勝行が担当した。調査の期間・面積は第Ⅱ章に記す。
- 一、本書の執筆・編集は、南、難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、岡村が行った。本書の用字用語や体裁などの調整は、東淀川調査事務所長 佐藤隆・総括研究員 趙哲済、田中清美・事業企画課長代理 清水和明の報告書校正委員が行った。
- 一、英文目次・要旨は、スコット・ライオンズ氏の協力を得て、岡村が作成した。
- 一、遺構写真は、岡村が撮影した。遺物写真の撮影は、一部を除き、寿福写真房 寿福滋氏に委託した。
- 一、基準点測量は、国際航業株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

## 凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学的用語の中で、遺跡に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって○層とのみ表記し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、掘立柱建物(SB)、井戸・水溜状遺構(SE)、溝(SD)、土壙(SK)、柱穴・小穴(SP)、水田畦畔(SR)、自然流路(NR)、祭祀関連遺構を含むその他遺構(SX)の分類記号の後に、番号を付している。番号は古墳時代中期の遺構に、301～399、飛鳥～奈良時代の遺構に201～299、中世の遺構に101～199を付けた。
4. 本書における遺物番号は、土器 1～100、滑石製白玉101～200の通し番号を付した。
5. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと記した。
6. 本書で用いた地層の土色および土器の色は[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
7. 本書で用いた土器編年と器種名については、古墳時代の土師器は[辻美紀1999]、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1981]、飛鳥～奈良時代の土器は[古代の土器研究会1992]に従った。



# 本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と周辺地域の歴史	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	5
1) 調査の経緯	5
2) 調査の経過	5
第Ⅲ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
第2節 古墳時代中期の遺構と遺物	11
1) 掘立柱建物・柱穴	11
2) 祭祀関連遺構	13
3) 水溜状土壌	17
4) そのほかの遺構・遺物	19
5) 小結	20
第3節 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物	21
1) 掘立柱建物・柱穴	21
2) 溝	21
3) 包含層出土の遺物	26
4) 小結	27
第4節 中世の遺構と遺物	28
1) 水田・畦畔・溝・踏込み	28
2) 掘上げ田	28
3) 自然流路	30
4) 土壌・小穴	30
5) 小結	30
第Ⅳ章 まとめ	31
1) 古墳時代	31

2) 飛鳥～奈良時代 .....	31
3) 中世 .....	31

引用・参考文献 .....	32
---------------	----

英文目次・要旨

抄録

# 原色図版目次

- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1 古墳時代の遺構(一)       | 上：掘上げ田検出状況(南西から)  |
| 上：調査地とその周辺(南東から)   | 中：NR101検出状況(北西から) |
| 下：古墳時代の遺構(南から)     | 下：水田畦畔SR103       |
| 2 古墳時代の遺構(二)       | 4 地層断面            |
| 上：SX316遺物出土状況(北から) | 上：西壁(A2区)         |
| 下：SX316出土遺物        | 中：北壁(A1～F1区)      |
| 3 中世の遺構            | 下：北壁(K1～P1区)      |

# 図版目次

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 古墳時代の遺構(一)            | 8 飛鳥～奈良時代の遺構(一)       |
| 上：第10層上面遺構群(西から)        | 上：第9層上面遺構群(西から)       |
| 下：第10層上面遺構群西部(北から)      | 中：第9層上面遺構群西部(北から)     |
| 2 古墳時代の遺構(二)            | 下：第9層上面遺構群東部(北西から)    |
| 上：第10層上面遺構群中央部(南から)     | 9 飛鳥～奈良時代の遺構(二)       |
| 下：SB301検出状況(南西から)       | 上：第9層上面遺構群西部(南から)     |
| 3 古墳時代の遺構(三)            | 中：第9層上面遺構群南部(北西から)    |
| 1：SP302(東から)            | 下：SD206遺物61出土状況(北東から) |
| 2：SP303(東から)            | 10 飛鳥～奈良時代の遺構(三)      |
| 3：SP304(東から)            | 上：SP202(北から)          |
| 4：SP305・306(南東から)       | 中：SP203(北から)          |
| 5：SP311(東から)            | 下：SP204(北から)          |
| 6：SP312(南東から)           | 11 飛鳥～奈良時代の遺構(四)      |
| 7：SP313(東から)            | 上：SD206南壁(北から)        |
| 8：SP314(西から)            | 中：SD207(南から)          |
| 4 古墳時代の遺構(四)            | 下：SD205(北から)          |
| 上：SX316と古代溝(未掘)の関係(北から) | 12 中世の遺構(一)           |
| 中：SX316検出状況(北から)        | 上：第5層上面水田(西から)        |
| 下：SX316遺物出土状況(北から)      | 中：第5層上面SR103(南東から)    |
| 5 古墳時代の遺構(五)            | 下：第5層上面SR104(南西から)    |
| 上：SX317遺物出土状況B地点北(北から)  | 13 中世の遺構(二)           |
| 中：SX317遺物出土状況B地点南(南西から) | 上：第4層上面掘上げ田(西から)      |
| 下：SX317遺物出土状況C地点(北西から)  | 中：第4層上面掘上げ田(東から)      |
| 6 古墳時代の遺構(六)            | 下：掘上げ田細部(北西から)        |
| 上：SE318(北から)            | 14 中世の遺構(三)           |
| 中：SE318埋土状況(南東から)       | 上：SK107(北西から)         |
| 下：SE318遺物出土状況(西から)      | 中：NR101(南西から)         |
| 7 古墳時代の遺構(七)            | 下：NR101(南東から)         |
| 上：SK319・320(南西から)       | 15 古墳時代中期の遺物(一)       |
| 中：SK321遺物出土状況(南から)      | 16 古墳時代中期の遺物(二)       |
| 下：SK322検出状況(南東から)       | 17 古墳時代中期～奈良時代の遺物     |
|                         | 18 飛鳥～奈良時代の遺物         |

# 挿 図 目 次

図 1	加美正覚寺遺跡の位置	1	図13	SX316出土白玉法量分布	16
図 2	調査地の位置	2	図14	SX317出土遺物	17
図 3	遺跡の立地	3	図15	水溜状土墳断面図	18
図 4	調査区の配置	5	図16	SE318出土遺物	19
図 5	地層と遺構の関係	7	図17	SK319ほか出土遺物	19
図 6	層序(北壁)	8	図18	SB201断面図	21
図 7	層序(上：南壁・下：西壁)	9	図19	飛鳥～奈良時代の遺構	22
図 8	SB301ほか柱穴断面図	11	図20	飛鳥～奈良時代溝断面図(1)	23
図 9	古墳時代中期の遺構	12	図21	飛鳥～奈良時代溝断面図(2)	24
図10	SX316	13	図22	飛鳥～奈良時代の出土遺物	25
図11	SX316出土遺物	14	図23	中世の遺構	29
図12	SX316出土白玉	16	図24	中世の出土遺物	30

# 表 目 次

表 1	層序表	9
-----	-----	---

# 写 真 目 次

写真 1	SX316検出状況(西から)	6	写真 3	第 7 層から出土した壺72	26
写真 2	調査風景(北から)	6			



## 第Ⅰ章 遺跡の立地と周辺地域の歴史

今回の調査地は旧正覚寺村の中心から北東300mに位置し、土地条件図[国土地理院1983]では平野川右岸の自然堤防から氾濫原に移行する付近に当る。明治期(1885～7年)に作成された陸地測量部仮製地図によると、周辺の旧地形は南西から北東に緩やかに下っている(図2)。

正覚寺村は、明応2(1493)年に焼失した正覚寺の後に作られた集落に由来する。正覚寺は天長2(825)年に弘法大師によって開創され、境内四町四方にわたり観音堂、金堂、講堂、六時堂のほか、山門廻廊など壮大で美しく、東之坊ほか五坊を有する大寺院であったと伝えられる[井上正雄1922]。戦国時代の幕開けとも評される「正覚寺合戦」として歴史的に著名な同寺は畠山政長の河内の軍事的拠点であるとともに、国内の寺社勢力を統合する機能を備えた都市でもあった[小谷利明2005]。その背景には街道を通じて奈良や河内南部に通じ、平野川の水運に恵まれた、交通の要衝の地という地理的な条件が大きかったものと考えられる。南西に接する平野郷と同様、この地の地下には濃密な歴史情報が埋もれていることが予想されるが、これまでの調査は調査地の南西300mで1997年に行われたCR97-2次立会調査(加美正覚寺4丁目)の一件に過ぎない。ここでは現地地表下1.6～1.8m付近で古墳時代後期の土師器が多数確認された。

周辺の遺跡の状況をみてみよう。調査地から半径1kmの範囲には、平野川・旧大和川流域を中心として加美北遺跡・加美遺跡(久宝寺遺跡)・長楽寺跡・加美西1丁目所在遺跡・平野寺前遺跡・平野環濠都市遺跡・亀井北遺跡があり、その周辺には平野馬場遺跡・桑津遺跡など多くの遺跡がある(図2)。個々の遺跡の詳細については、それぞれの報告書を参照されたい。ここ

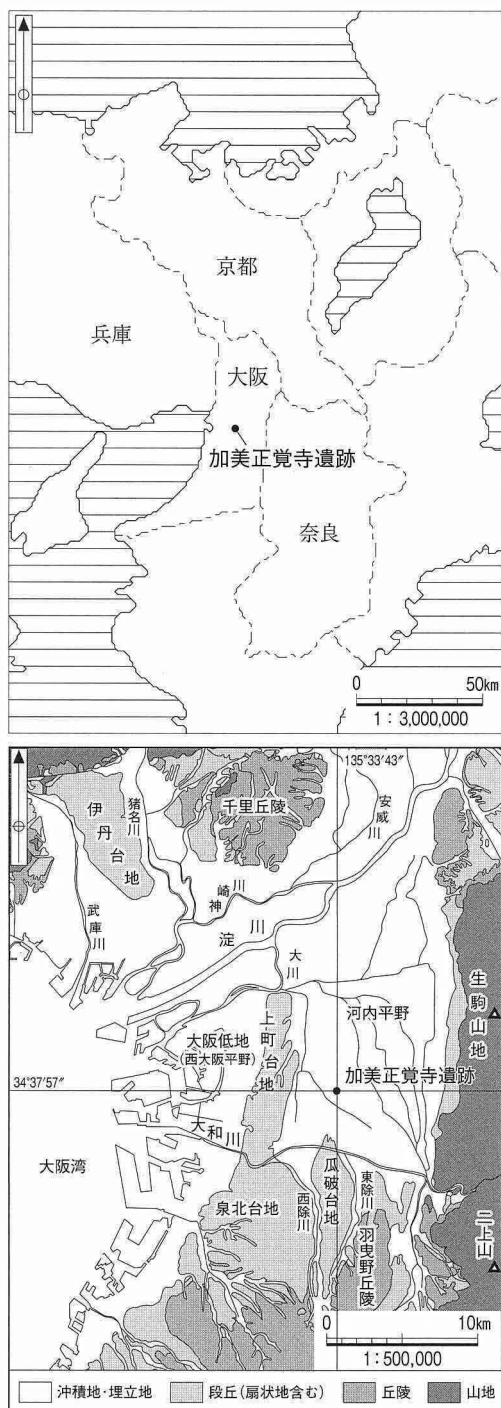


図1 加美正覚寺遺跡の位置



図2 調査地の位置

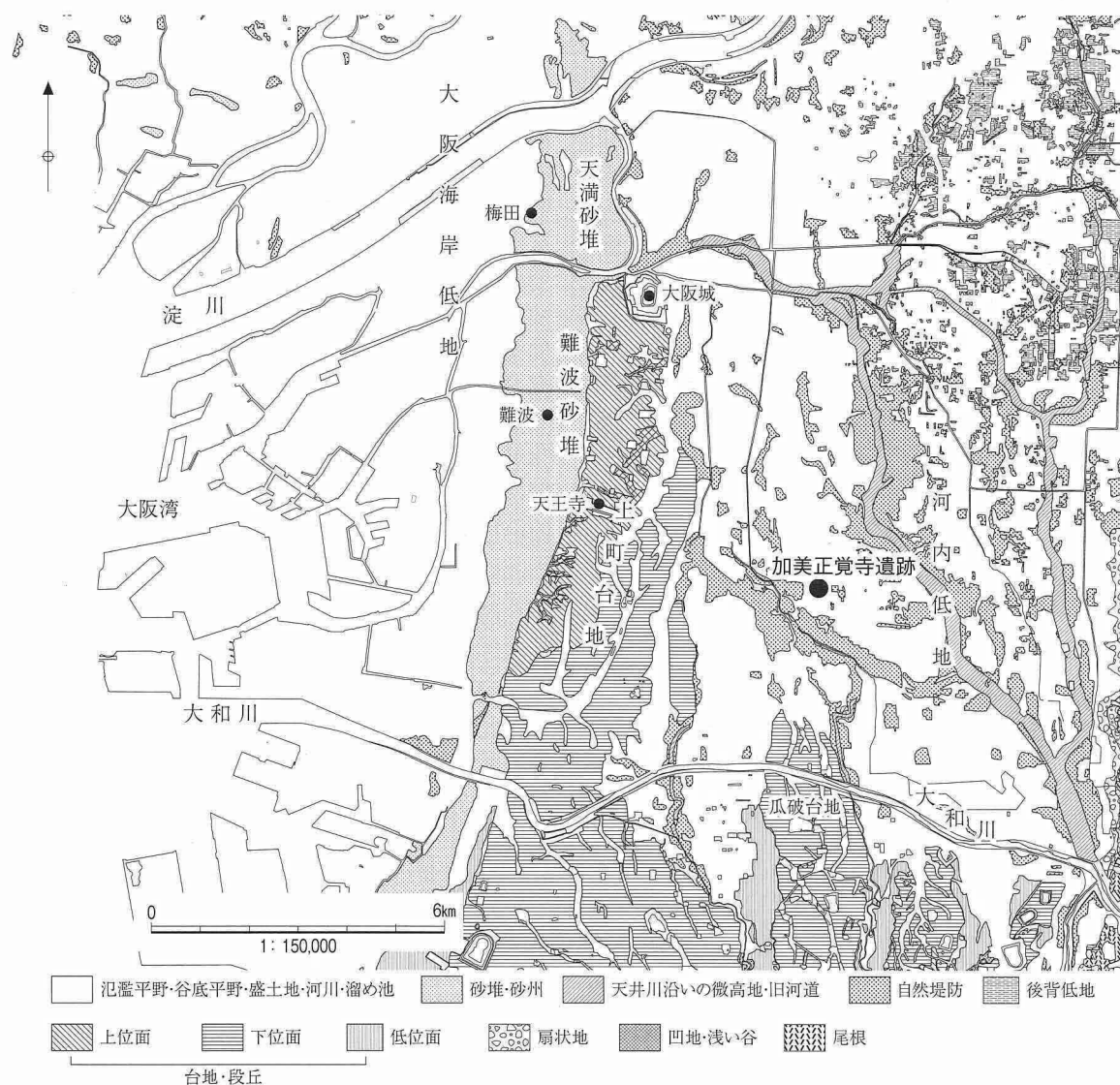


図3 遺跡の立地

(土地条件図[国土地理院1983]をもとに作成)

では今回の調査で発見された中世以前を中心に述べる。

加美正覚寺近辺では、旧石器～縄文時代の資料は確認されていないが、上町台地の東斜面に広がる桑津遺跡では、後期旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の有茎尖頭器が発見されている[大阪市文化財協会1998]。遺跡に最も近く、弥生～古墳時代の豊富な内容を伝える遺跡は、東南500mにある加美遺跡である。旧大和川の自然堤防上に立地し、これまで30件以上の調査を行い、遺跡の概要が明らかになっている[大阪市文化財協会2003a・b、大阪文化財研究所2011a]。なかでもKM84-1次調査で発見された、弥生時代中期後葉のY1号墓は、長さ26m、高さ3mと近畿地方最大級であり、その豊富な遺物は、当時、この地が広範な地域の政治的な拠点であったことを示している。弥生時代終末～古墳時代初頭になると、吉備・山陰・讃岐・阿波・近江・東海などの外来の土器が多く出土し、古墳時代社会への変動期においても、地域の中核的な集落であった。古墳時代前期では、北部の低地に水田域、高所に当る南部・西部に畠が集中して見られ、KM00-5次調査では、水田域と居住域との境が発見されている。古墳時代中期～飛鳥時代には遺物は見られるものの遺構は少なく、おもに耕

地化していたと考えられる。しかし、奈良時代に入ると遺跡北部で集落の存在を示す掘立柱建物や、絵馬・人面墨画土器など祭祀遺物を多く出土する流路が検出され、銅製の銚帯や、和同開珎・万年通宝・神功開宝が重なった状態でみつかるとなど[豆谷浩之1996a・b]、公的な施設の存在が窺える。中世では、遺跡西端の加美東4丁目のKM01-4次調査で、14世紀前半の井戸や溝、JR加美駅のすぐ南で、12～15世紀の遺物が検出されている。また、鞍作廃寺で近年行われたKM10-1次調査(加美鞍作2丁目)では、鎌倉時代の建物と区画施設の可能性がある南北溝が発見された。

平野環濠都市遺跡では、遺跡西端で弥生時代の遺構面が検出され、後期の広口壺が出土している[大阪市文化財協会2009]。環濠内は小規模な調査が一般的であり、中世より古い地層に到達できないことが多いが、遺跡北部では旧大日本紡績会社平野工場敷地内(平野宮町)で出土した弥生式土器や、遺跡北東の平野川右岸では、江戸時代(明和年間)に出土した扁平紐式銅鐸(弥生時代中期後葉)があり、同遺跡とその周辺には弥生期の集落が広がっているものと考えられる。集落そのものの具体的な状況は分からないものの、古墳時代～古代の遺物も上位層中に散見される。9～10世紀に入ると、市町で行われたHN84-15次調査などでは、遺構が見つかり、この地の開発の画期が想定されている。戦国時代には堺と並び称される平野であるが、中世の実像を伝える資料は非常に少なく、発掘調査の成果に期待されるところが大きい。

上町台地に目を転じると、桑津遺跡では古墳時代中期では竪穴建物のほか、多くの埴輪が発見されており、古墳の存在が窺える。飛鳥時代では、同遺跡では最古級の呪符木簡が発見されるなど、集落が続く奈良時代まで確認されている。近年では、林寺遺跡のHY00-1次調査では、飛鳥～奈良時代の建物群、溝などが発見され、百済郡の成立との関係が注目される[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。



## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 1) 調査の経緯

大阪市平野区加美正覚寺三丁目2～4に所在する市加美神明住宅用地内の埋蔵文化財の遺存状況を確認するため、大阪教育委員会の委託により、大阪文化財研究所が2010年8月18日から20日に2箇所を試掘調査(KM10-2次調査)を行った。その結果、いずれの試掘箇所においても現地表下約1.0～1.5mで、古墳・飛鳥・奈良時代、中世と考えられる遺構面および遺物が確認された。この試掘調査結果に基づき、長さ80m、幅8mの範囲で発掘調査が実施されることとなった。

### 2) 調査の経過

調査は残土置き場を確保し、敷地北側で行った(図4)。調査区の面積は当初640㎡であったが、現地表下約1.0mで検出された掘上げ田の全体確認のために拡張し、最終的には約850㎡となった。調査区は5m毎に西から東にA～P区、北から南に1～4区に分け、組み合わせて、地区の名称とした(図4)。調査の経過は以下のとおりである。

平成22年10月4日より、ゲートの設置、ネットフェンスの撤去、搬入路の整備、調査区の設定などの準備工を開始した。重機掘削は試掘調査の所見をもとに、近現代盛土層および近世作土層までを対象に、同月12日から26日まで行った。同月13日、調査区中央で自然流路NR101を確認した。一方、

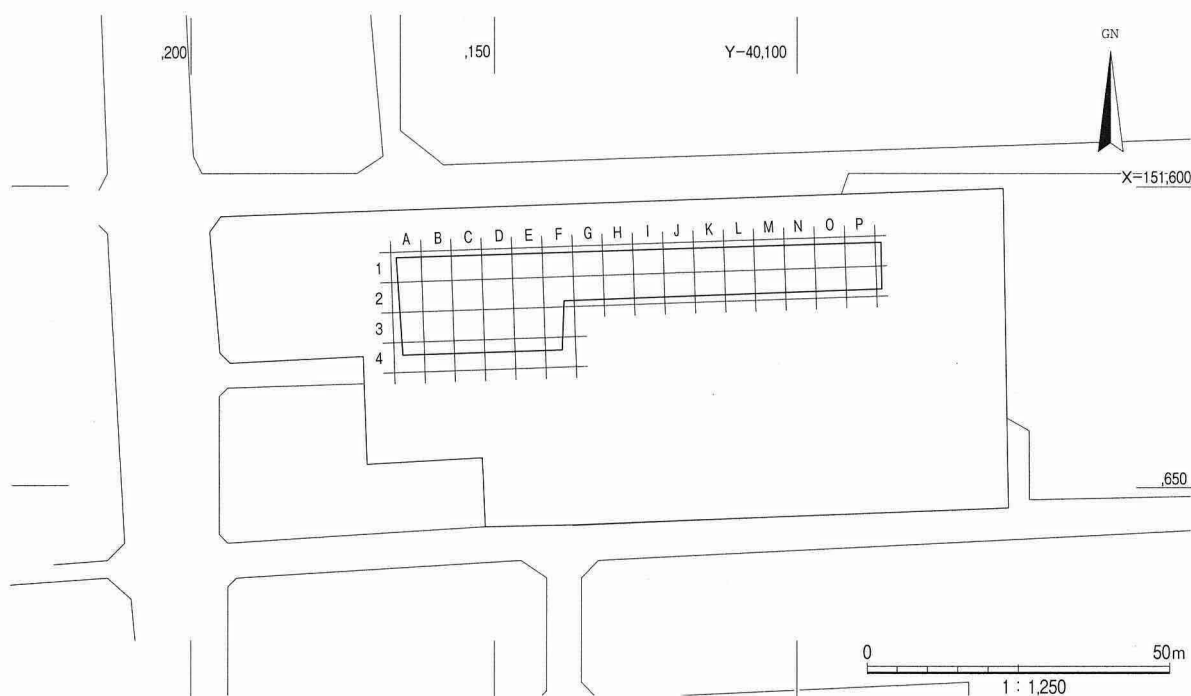


図4 調査区の配置



写真1 SX316検出状況(西から)

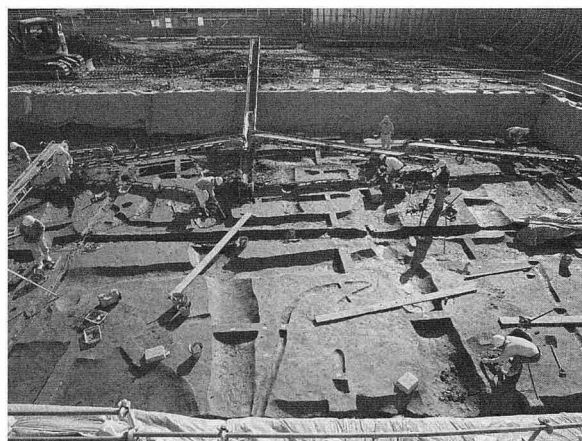


写真2 調査風景(北から)

南壁沿いに設けた側溝(B2区)では、古墳時代中期の土器が多数出土し、当該期の遺構・遺物が下位に密に存在することが予測された(写真1)。22日にNR101の埋土(粗粒砂)を掘り上げ、掘上げ田の掘潰れ(凹部)が存在することを確認した。全体の形を調べるために、27日から重機掘削によって調査区西部の東西26m分を南に8m拡張した。その後は人力によって地層毎に掘削を進め、中世の水田・掘上げ田、古代の掘立柱建物、溝群などを検出し、記録作業を進めた。12月8日に古代遺構面の写真測量を行った。翌9日、古代以前の遺構の分布が希薄であったG区以東の遺構ならびに地層の記録を終え、先行して埋め戻した。14日から、SX316の取り上げた土壌の洗浄を開始し、初日で百個以上の臼玉を回収した。16日、古墳時代を中心とする遺構群について、2度目の写真測量を行った。その後、第10層上面で遺構の検出、記録に進め、12月22日に調査作業を終了した。同日、埋戻しを始め、12月28日に現場作業を完了した。

調査終了後、報告書の作成を開始した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、出土遺物の復元、実測作業などを行った。遺物の撮影は専門カメラマンに委託した。これらの資料をもとに作図・トレース・原稿執筆・編集作業を行った。これらの作業はパーソナルコンピューターを用い、レイアウト済みのデジタルデータとカラーポジフィルムを印刷業者に入稿し、印刷を経て本書を完成させた。

### 第Ⅲ章 調査の結果

#### 第1節 層序

現地表の標高は部分的な現代盛土によるかさ上げを除けば、調査区内ではTP+4.9mとほぼ一定である。部分的な深掘りを含めて、現地表下約2.3m (TP+2.6m) までの地層を観察した。確認した地層は沖積層(難波累層)最上部および上部に相当する。以下に各層の岩相やその特徴を記す(図5～7、原色図版4)。

第0層：現代の盛土層(バラス含む)および攪乱層で、層厚は50～110cmである。

第1層：近代の作土層で、層厚は20～30cmである。

第2層：灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトからなる近世の作土層で、層厚は40cmである。

第3層：4層に細分した。第3-1層は黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂からなる、NR101を充填する洪水砂層で、A～K区に分布する。層厚はA～D区では20cm以内であるが、NR101中央部では90cmとなる。トラフ型斜交ラミナが発達し、古流向はおおむね南東から北西である。最上部からは13世紀代に属する土師器羽釜77・78、瓦器椀が出土した。第3-2層は、黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂からなる洪水砂層であり、層厚は60cmである。トラフ型斜交ラミナが発達し、古流向は北東から南西である。遺物は

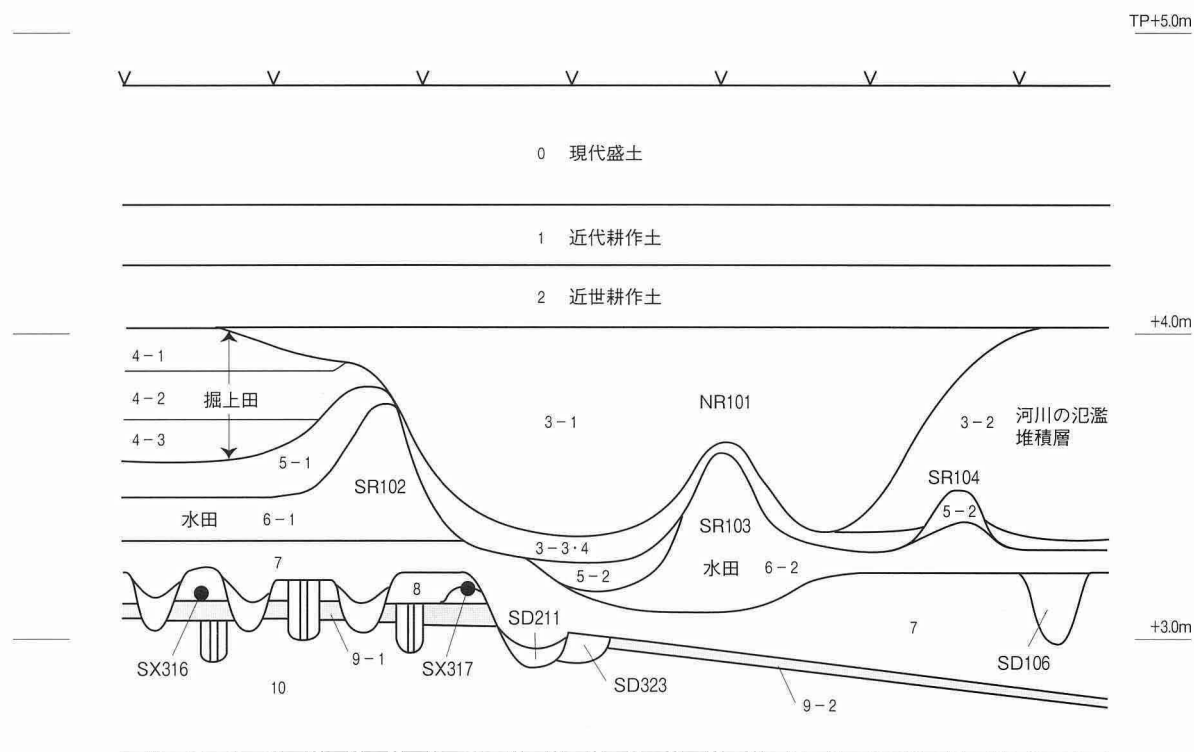


図5 地層と遺構の関係

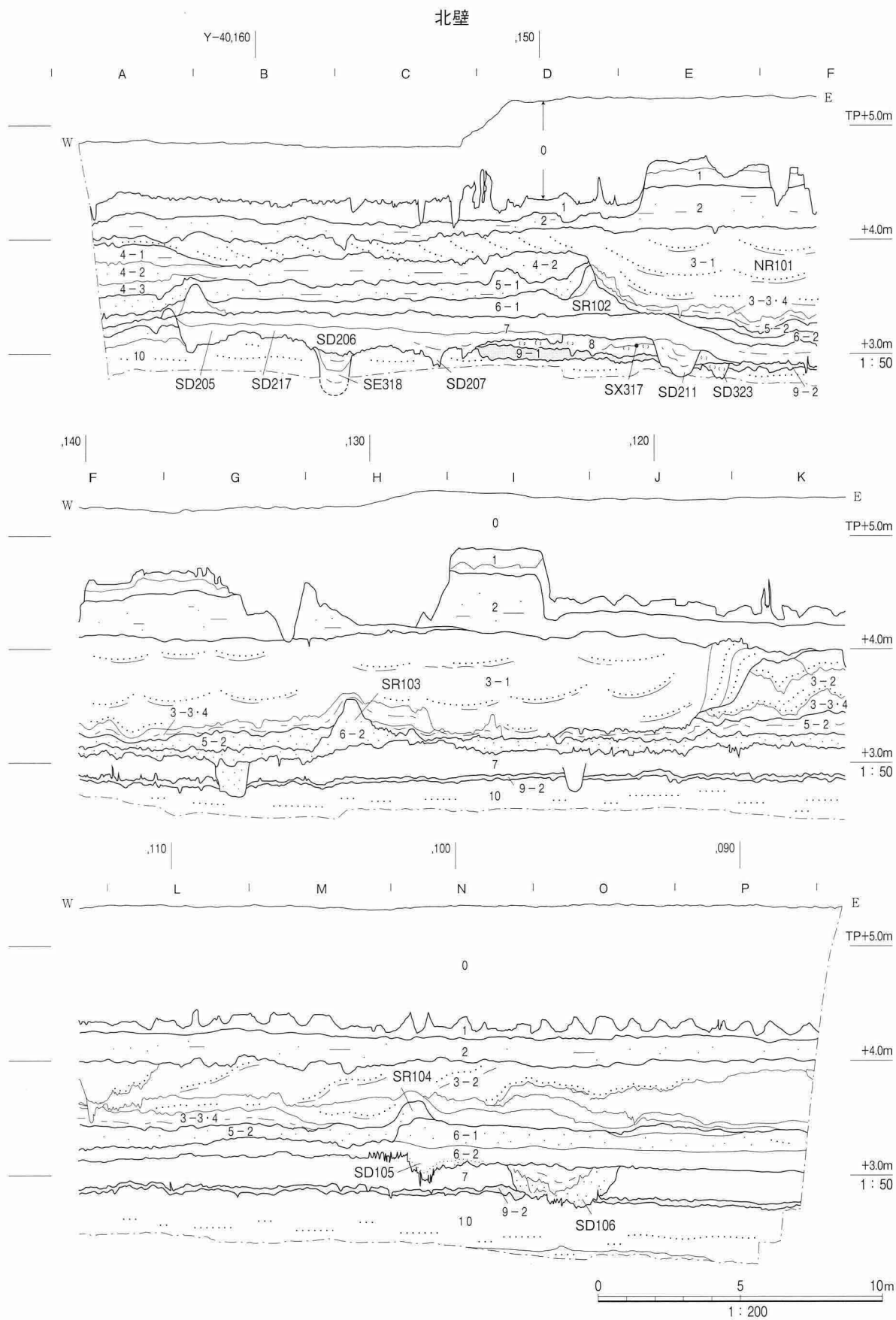


图6 层序(北壁)



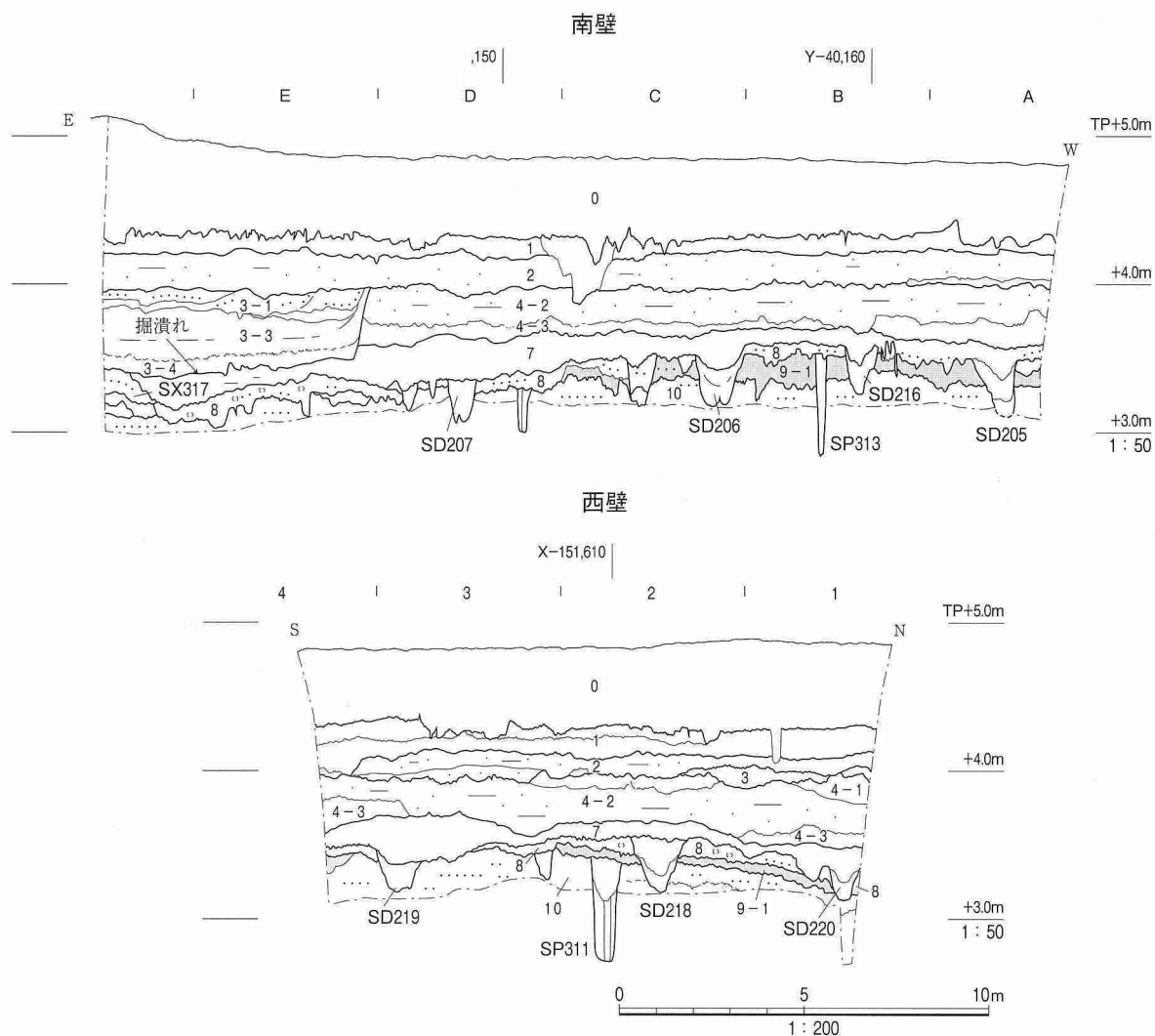


図7 層序(上：南壁・下：西壁)

表1 層序表

層序	主たる岩相	層厚(cm)	地層の特徴	遺構	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土層および攪乱層	50~110				現代
第1層	灰オリーブ(5Y4/2)粗粒砂質シルト	20~30	作土層			近代
第2層	灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルト	40	作土層		肥前磁器	近世
第3層	1 黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂	20	水成層	←NR101	土師器・瓦器	中世
	2 黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂	60	水成層			中世
	3 灰色(10Y4/1)シルト層	10~30	水成層			中世
	4 灰色(10Y4/1)シルト層	10	水成層	←SK107	土師器・須恵器	中世
第4層	1 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト	15~20	作土層		瓦器	中世
	2 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト	15~20	作土層		土師器・須恵器	中世
	3 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト	15~20	作土層		土師器・須恵器	中世
第5層	1 灰色(7.5Y4/1)細粒質シルト	10~20	作土層		土師器・須恵器	中世?
	2 オリーブ黒(10Y3/1)粘土質シルト	10~20	作土層			中世?
第6層	1 オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルト	10~25	作土層		土師器・須恵器	中世?
	2 オリーブ黒(10Y3/1)中粒砂質シルト	10~40	作土層			中世?
第7層	オリーブ黒色(10Y3/1)極細粒砂質シルト	10~30	水成層	←SD205	土師器・須恵器	飛鳥~奈良時代
第8層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルト	5~15	盛土層	←SX316	土師器・須恵器	飛鳥~奈良時代
第9層	1 黒色(7.5Y2/1)極細粒砂~シルト	3~15	古土壌		土師器・須恵器	古墳時代
	2 黒色(7.5Y2/1)極細粒砂~シルト	3	暗色帯	←SB301		古墳時代
第10層	暗緑灰色(7.5GY3.5/1)細粒砂~中粒砂	40以上	水成層		土師器・須恵器	

凡例 ← 上面検出遺構

確認できなかった。第3－3層・第3－4層はともに灰色(10Y4/1)シルト層からなる湿地性堆積層で、掘上げ田の掘潰れ(凹部)から調査区の東端まで全域に分布する。層厚はともに10cm前後である。第3－3層は植物遺体およびそのラミナからなる薄層を2層挟在していた。遺物は確認できなかった。掘潰れに堆積した第3－4層からは下位の遺物包含層に由来する奈良時代以前の土器が多く出土した。

第4層：A～F区で確認した掘上げ田の作土層で、掘潰れの掘削土の盛土に由来する。灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルトからなり、層厚は約50cmで、3層に細分できる。いずれも酸化マンガン、酸化鉄の斑紋が顕著であった。出土遺物はほとんどが古墳時代中期～古代に属するが、第4－1層は13世紀代の瓦器碗を少量含む。上面でNR101、SK107・SP108・109を検出した。

第5層：2層に分けた。第5－1層はA～F区で確認した灰色(7.5Y4/1)細粒質シルトからなる作土層で、層厚は10～20cmである。古代以前の遺物を含む。第5－2層はE区以東に広がる作土層で、オリーブ黒(10Y3/1)粘土質シルトである。SR104を形成する。層厚は10～20cmである。本層では遺物を確認できなかったが、掘上げ田の掘潰れと同様、第3－4層に覆われており、中世に属する可能性が高い。

第6層：2層に分けた。第6－1層はA～E区に分布する。オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルトを主体とする作土層で、層厚は10～25cmである。A～F区では奈良時代以前の遺物を含む。SR102を形成する。第6－2層はE区以東に分布するオリーブ黒(10Y3/1)中粒砂質シルトを主体とする作土層で、層厚は10～40cmである。中粒砂を多く含み、H区ではSR103を形成する。遺物は確認できなかった。

第7層：オリーブ黒色(10Y3/1)極細粒砂質シルトを主体とする湿地性堆積層で、層厚は10～30cmである。A～F区では飛鳥～奈良時代の溝群の埋土を覆い、下部には、奈良時代以前の遺物を含む。

第8層：偽礫を含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)極細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は5～15cmである。F区以西の飛鳥～奈良時代の溝群を掘った際の排土に由来する。上面で飛鳥～奈良時代の溝を中心とする多数の遺構を検出した。

第9層：黒色(7.5Y2/1)極細粒砂～シルトからなる暗色帯で、層厚は3～15cmである。最も高い調査区南西のA4区ではTP+3.5m、最も低い東端のO1区ではTP+2.8mである。A～F区では土壌生成が著しく、古墳時代中期の遺物を包含し、上面、層中からは当該期の多数の遺構を検出した。G区以東では、層厚3cm前後の薄層となり、遺物は確認できなかった。前者を第9－1層、後者を第9－2層と区別した。

第10層：暗緑灰色(7.5GY3.5/1)細粒～中粒砂からなる湿地性堆積層である。遺物は確認できなかった。A～F区では上部が土壌化し、上面で古墳時代中期の遺構を検出した。層厚は40cm以上である。

## 第2節 古墳時代中期の遺構と遺物

今回の調査で検出した古墳時代中期の遺構は約100基で、掘立柱建物・柱穴・水溜状土壇・土壇・溝・祭祀関連遺構がある。これらはF区以西に分布し、なかでも柱穴はその南半部に集中し、集落は地形の高い南と西に広がっている状況が窺える。調査区内の旧地形は柱穴が密集する一帯がもっとも高く、東に徐々に低くなる。G区より東はほとんど遺構、遺物は確認できず、調査区は集落の東端にあたる可能性が高い。

遺構検出は第9層上面・層中での平面的な把握が困難であったため、埋土とのコントラストが明確な第10層上面で確認せざるを得なかった。このため、上位の飛鳥～奈良時代の遺構も一部含まれている可能性がある。特に小穴や柱穴など遺物を出土しない遺構の場合、埋土では区別できず、時期の分類は困難であった。ただし、遺物量の点では古墳時代の遺物は古代のものよりもかなり多く、柱穴の多くは古墳時代に属する可能性が高い。以下、主要な遺構を記述する。

### 1) 掘立柱建物・柱穴(図8・9、図版2・3)

大小の柱穴を70基以上検出し、多数の掘立柱建物や塀あるいは柵列が存在したものと思われるが、

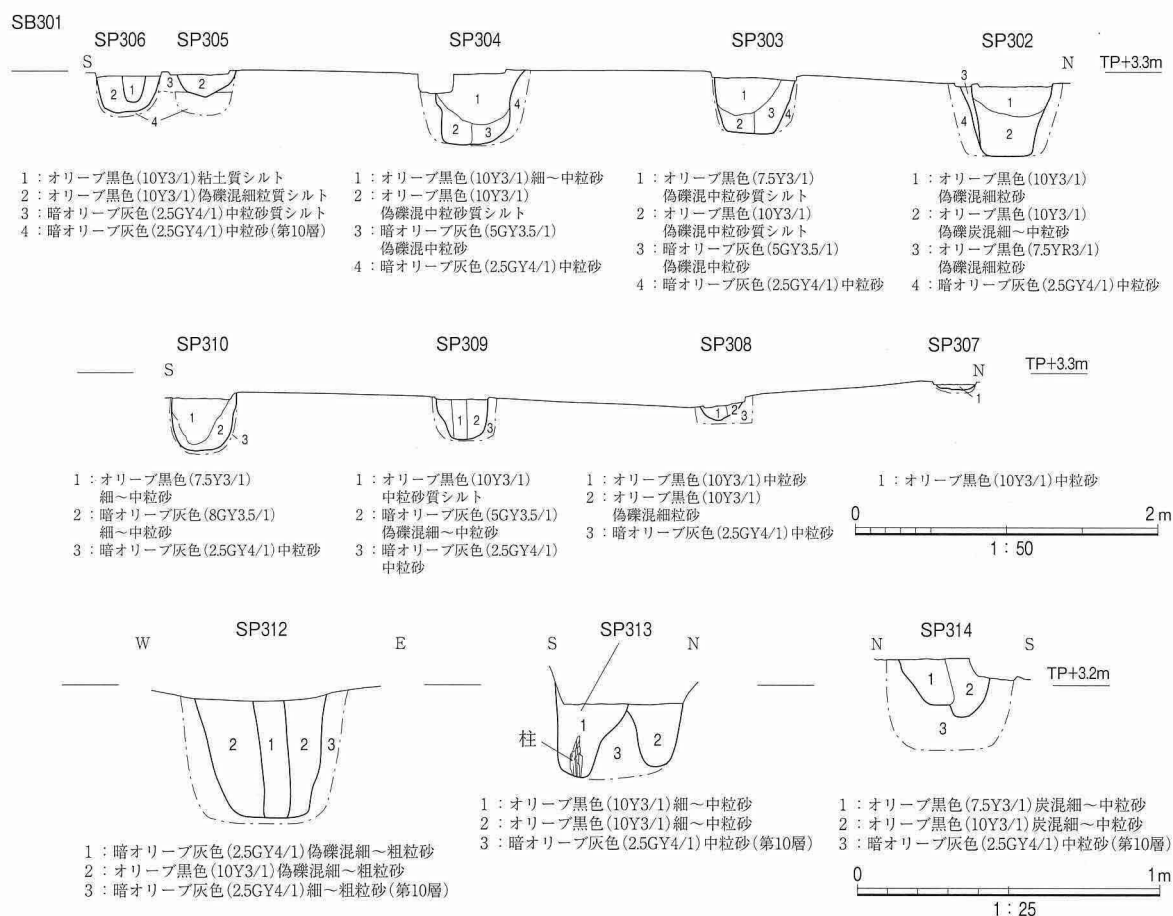


図8 SB301ほか柱穴断面図

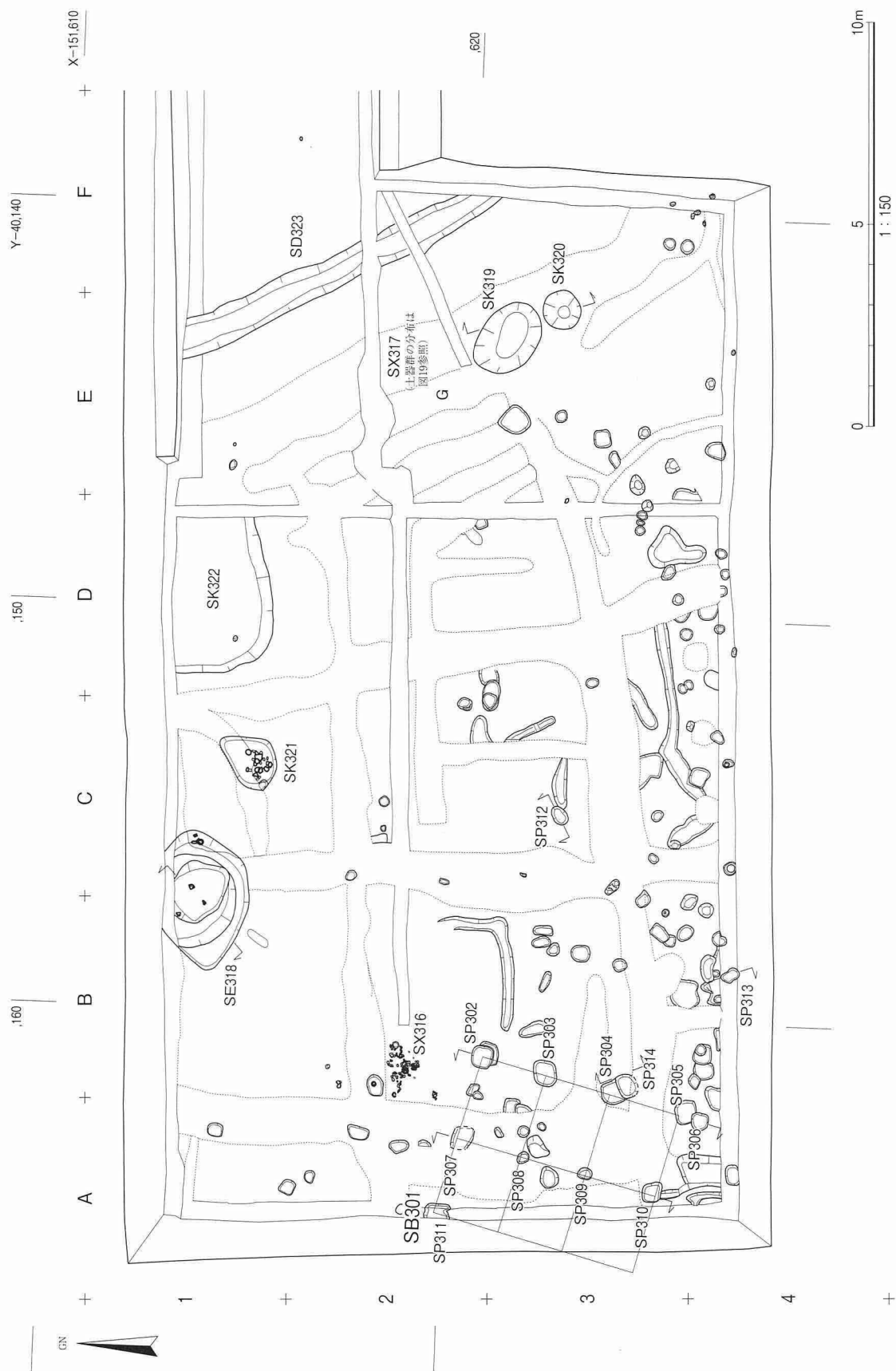


図9 古墳時代中期の遺構

明確に組合せを復元することができたのは、SB301のみである。柱穴は隅丸方形あるいは円形で、長さ・深さとも0.3～0.5mが一般的である。柱痕跡が明瞭に観察できたのはSP311・312で、SP313では柱そのものを検出した。

SB301 A3・4区で検出した総柱の掘立柱建物跡である。規模は梁間2間(4.0m)、桁行3間(5.2m)で、柱間は梁間で2.0m、桁行で1.6～1.9mである。建物の方向は、座標北に対して、東に15度振る。SP302・304では柱の建替えが認められる。柱の掘形は側柱では平面形は隅丸方形で、一辺0.5～0.8mである。上位の遺構による削平を受けず、最も依存状態が良いSP311(図7)は、深さ0.7m、柱痕跡の径は約20cmである。中柱にあたるSP308・309は平面形が円形に近く、一辺0.3mと小ぶりである。柱穴からは土師器甕・製塩土器・須恵器杯の小片が出土した。これらの時期は特定できないものの、周辺遺構の出土遺物はほぼTK23～47型式に限定され、この時期に属するものと考えられる。

## 2) 祭祀関連遺構(図10～14、原色図版2、図版4・5・15～17)

SX316 B2区で検出した土器が集中的に出土する遺構で、土器の分布範囲は東西1.4m、南北0.8mに及ぶ。南側を除き、3方が飛鳥～奈良時代の溝により削平される。掘形は確認できず、土器は地表上に置かれ、その後自然埋没し、後世の溝掘削時の排土によって保存されたものと考えられる。

出土遺物は土師器高杯・鉢・小型壺・直口壺・甕・ミニチュア土器・製塩土器、須恵器杯・高杯、滑石製白玉がある。土師器では小型壺・高杯、須恵器では杯・高杯が圧倒的に多い。図化していない土器片の総量は6.0kgで、うち土師器は小型壺2.9kg、高杯ほか1.0kg、須恵器は杯1.3kg、高杯ほか0.8kg

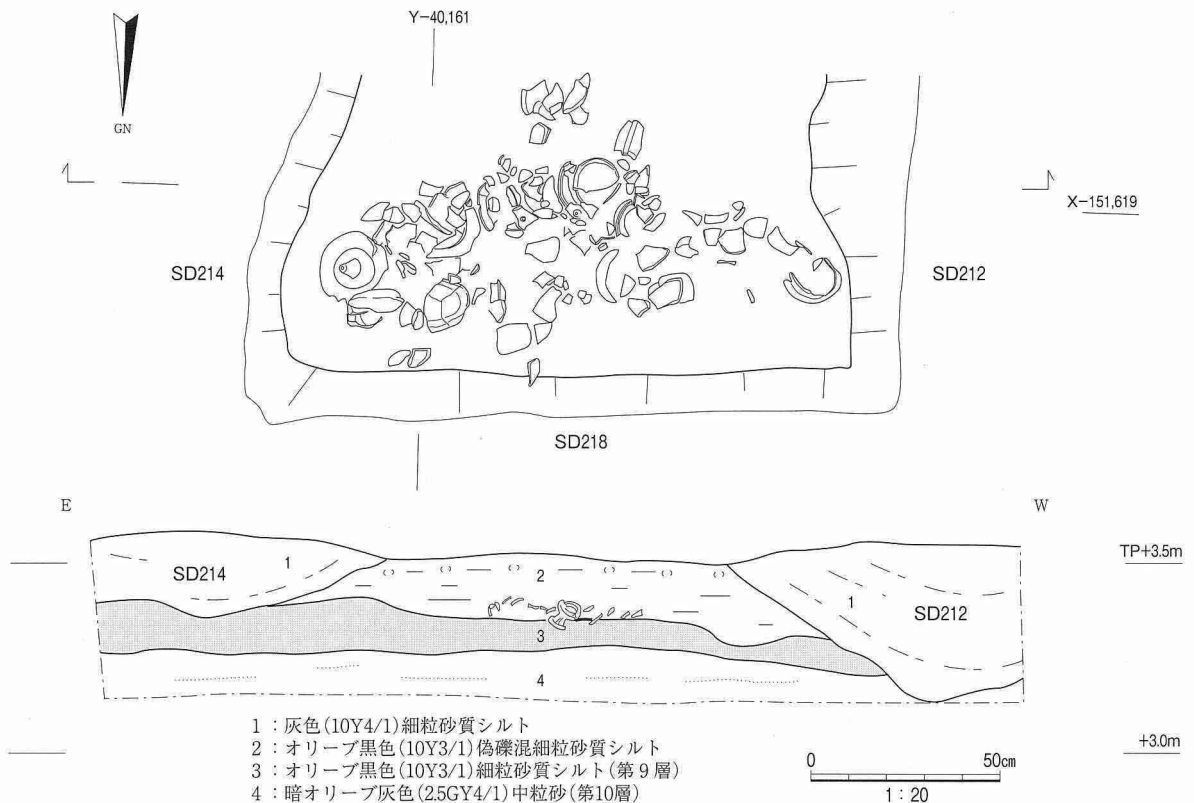


図10 SX316

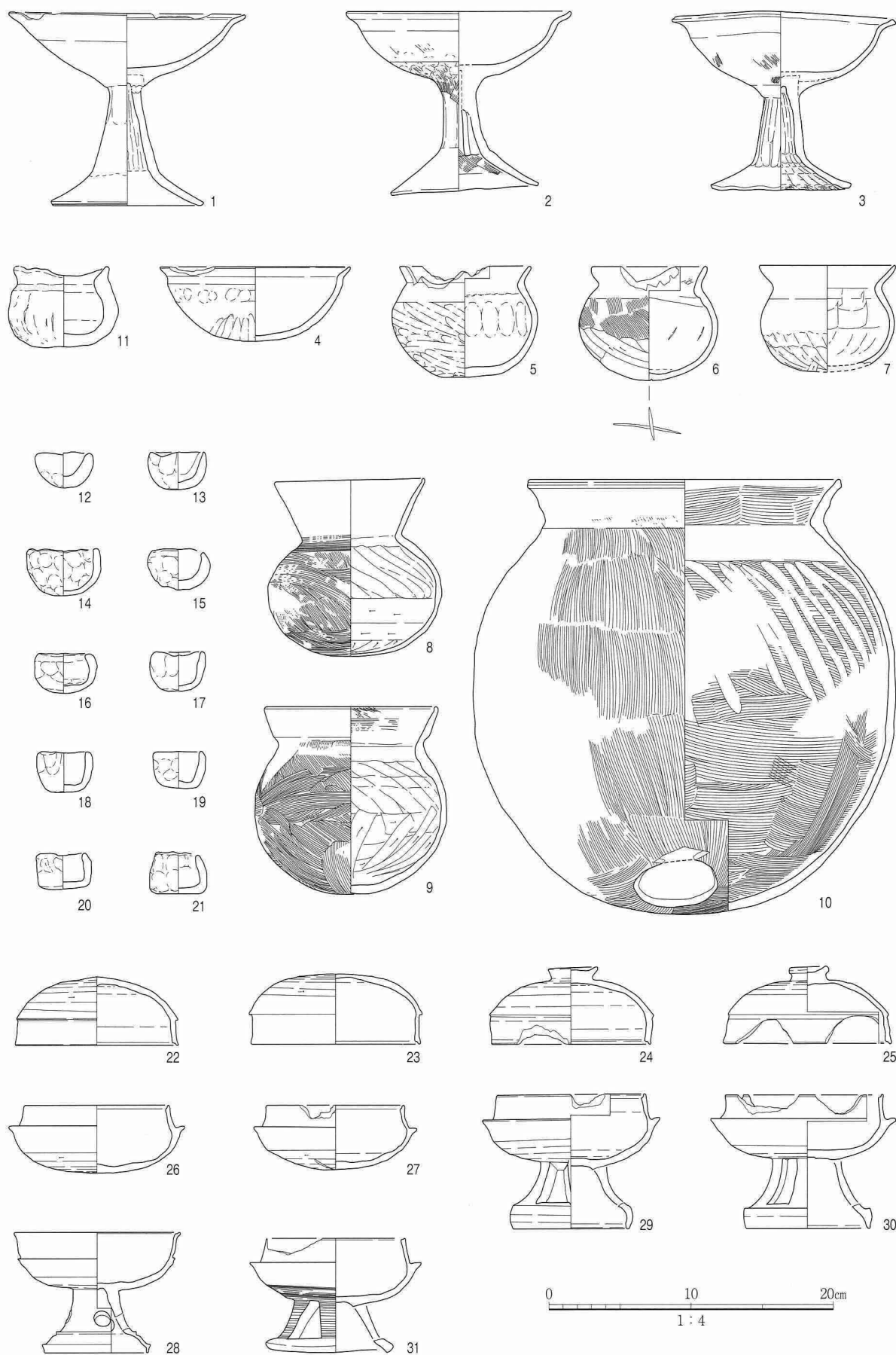


图11 SX316出土遗物

である。土師器小型壺、高杯の重さはそれぞれおよそ200g、400g、須恵器杯、高杯の重さはそれぞれおよそ160g、260gであり、土師器の場合、小型壺18、高杯2、須恵器の場合、杯8、高杯3の個体数と概算できる。図化資料と合わせれば、土師器では小型壺21、高杯5、須恵器では杯12、高杯8となり、ミニチュア土器や甕のほかに、およそ40～50個体の土器が使用されたものと推定できる。ミニチュア土器を除く多くの土器の口縁部に打欠きが認められ、土師器高杯の一つは脚部が意図的に杯部の上に置かれていた。また、後述するように少なくとも800個以上の滑石製白玉が散布されており、何らかの祭祀が行われたことは間違いない。

**出土遺物** 1～21は土師器である。ミニチュア土器を除き、精良な胎土を用い、色調は明るい橙色系である。1～3はいずれも口縁端部が短く屈曲する高杯である。1は柱状部の断面は六角形を呈し、杯部、脚部とも全面ナデで最終調整する。口縁部の3箇所には打欠きが認められる。2は口縁端部がやや内湾する。杯部と脚部との間には指頭圧痕、ハケ、裾部内面はハケが顕著で、最終仕上げの省略が窺える。口縁部は5/8残り、この範囲には打欠きは認められない。3は杯部外面をハケの後、ナデで調整する。柱状部外面は丁寧なミガキが施されるが、脚裾部内面は整形時のユビオサエをそのまま残し、底部の平面形態は多角形を呈する。口縁部は約半分残り、この範囲には打欠きは認められない。杯部の高さに対する口径の割合は、それぞれ30、31、32である。4は鉢である。底部外面を一定方向からヘラケズリを施し、体部前半部には指頭圧痕が顕著である。口縁部の2箇所に打欠きが認められる。5～7は口縁部を短く外反させる小型壺である。高さ7.5～8.0cm、口径7.9～9.7cm、ほぼ同じ法量で、内外面とも基本的にヘラケズリで調整し、ハケあるいはナデで調整する。5はやや平底気味である。6は底部に「×」のヘラ記号がある。7は5・6より薄手で、口縁部はやや長く、より外反する。口縁部の打欠きは、5は複数箇所、6は1箇所に認められる。7は口縁部の大半を欠失しており、打欠きの有無は不明である。8は直口壺である。体部外面は細かいハケ、内面は下半部をケズリ、上半部を強いナデで調整する。口縁部の約半分を欠失し、打欠きの有無は不明である。9は小型の甕で、高さ13.2cm、口径11.9cmである。外面は丁寧なハケ、内面はヘラケズリである。10は甕で、口径21.6cm、高さ30.6cmである。外面は縦方向の粗いハケ、内面はハケ後、上半部をユビナデで調整する。底部に径6.0cmの孔を焼成後に穿つ。11～21はミニチュア土器である。11は外反する短い口縁をもつ平底の土器で、口径6.4cm、高さ5.3cmである。手づくねで成形され、器壁は1cm前後と厚い。体部外面には粘土紐の継ぎ目が残る。12～21は高さ2.5～3.3cm、口径2.6～4.4cmで、手づくねで成形され、12を除き、指頭圧痕が顕著である。器形は丸底で、口縁部が直立あるいは内湾し、全体に丸みを帯びた一群(12～16)と、底部が平底で全体に角張った一群(17～21)がある。

22～31は須恵器である。土師器同様、口縁部に打欠きが認められるものが多い。22・23は杯蓋で、口径は11.3cm、11.7cm、高さは4.8cm、4.9cmである。22は天井部が丸く、丁寧な回転ヘラケズリを施す。口縁部の打欠きは完形品である22にはなく、23は約2/3残る口縁部には確認できない。26・27は杯身である。立上がりはやや内傾気味で、端面は内傾する。口径は10.0cm、9.6cm、高さは4.7cm、4.5cmで、ともに底部に丁寧な回転ヘラケズリを施す。27には底部に一本線刻のヘラ記号、口縁部に打欠きがある。24・25は高杯蓋である。天井部は約2/3を丁寧な回転ヘラケズリを行い、丸みがある。口縁端部



は24は内傾、25は外傾する。ともに2箇所打欠きがある。28は無蓋高杯である。脚は三方に円形スカシ孔を穿ち、脚端部を上下に突出させる。全体にシャープな稜をもつ。29～31は有蓋高杯である。ともに脚部の三方に長方形スカシ孔を穿ち、31は脚部から杯部底部は回転ハケで調整される。口縁部にそれぞれ1ないし2箇所の打欠きが認められる。

以上の出土土器は、脚部に円孔をもつ無蓋高杯28のように古い要素もあるものの、須恵器杯身が口径が10cm弱と縮小化し、高く丸い天井部、口縁端部の明瞭な凹面の特徴から、概ねTK47型式を中心とするものと考えられる。

**滑石製白玉** 土器の検出中に滑石製白玉が確認されたため、土器群の上位と下位の土壌について、幅1mの範囲を回収し、洗浄したところ、上位では792個、下位では60個、合わせて852個を回収することができた。土器群の端から0.5m離れた土壌からも数個検出しており、広範囲に散布された状況が窺える。白玉の径・厚さを計測した結果、径は4.6～5.8mm、厚さは1.9～4.0mmに集中し、平均は直径5.3mm、孔径1.7mm、厚さ3.0mmである。その分布は図13に示す通りであり、これまでの資料では、瓜破遺跡(UR00-8次調査)の8ci層中(5世紀末～6世紀前葉)の資料群(94点)の分析結果[大阪市文化財協会2002]と同様な傾向を示す。

**SX317** E1～4区、F4区で検出し、盛土上に土器がまともって出土した遺構である。盛土は長さ14m以上、幅は約1.5mで、高さ0.2mである(図19)。最終的には盛土は飛鳥～奈良時代のSD211の掘削土によって形成されているが、土器群はその下位から検出された(図20)。土器は完形品のほか、口縁

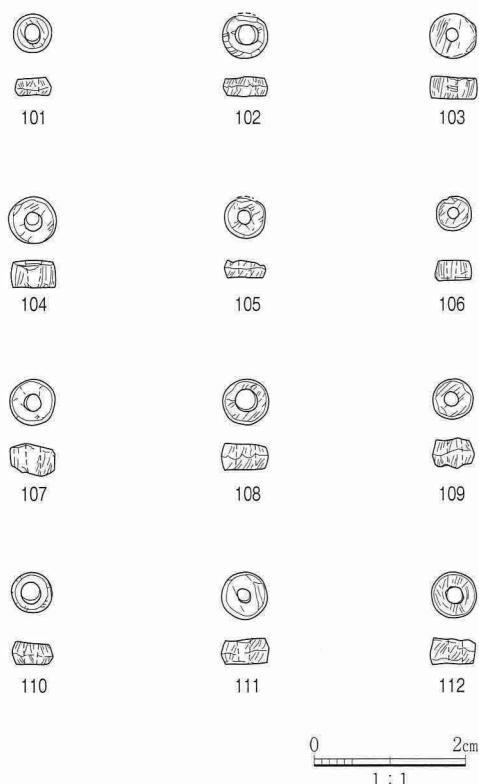


図12 SX316出土白玉

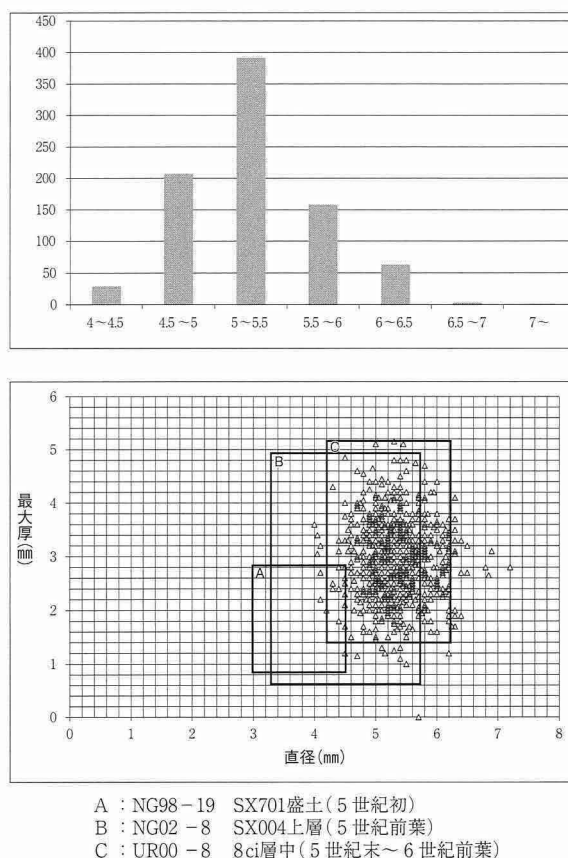


図13 SX316出土白玉法量分布

部に打欠きをもつものもあり、また、臼玉もまとめて検出されている。土器群は原位置から大きく移動しておらず、飛鳥～奈良時代の溝掘削による新たな盛土によって土中に保存されたものと考えられる。須恵器杯を中心とする遺物の集中出土地点は少なくとも3箇所で認められた。北からA～C地点と呼び、SD219で分断されたB地点は北と南に分ける(図19)。F4区のC地点が最も多く、5個体分の杯が出土した。A地点では須恵器杯身42・高杯43・44、B地点南では土師器甕のほか、杯身36～38が重なるように出土した。C地点は散漫に分布し、土師器甕、高杯、杯蓋34、杯身39～41が出土した(図版5)。さらにA地点では22点の臼玉が出土した。SX317以東では、東2mにあるSD323が同時代の可能性がある以外は遺構・遺物はなく、集落の端で行われた祭祀の跡である可能性が高い。

**出土遺物** SX317からは土師器鉢・甕、須恵器杯・高杯・壺が出土した。32は土師器鉢で、口径12.2cm、高さ4.9cmである。口縁部は短く外反し、端部を軽くつまみ上げる。体部下半をケズリ、そのほかの内外面をナデで調整する。33～44は須恵器である。33・34は杯蓋で、それぞれ口径12.4cm、11.8cmである。天井部は丁寧な回転ヘラケズリだが、口縁部との稜はやや鈍い。33は口縁部に少なくとも3本の線刻がある。34は口縁部に打欠きがあり、肩に他個体が溶着している。35～42は杯身で、口径9.9～11.0cm、高さ4.7～5.2cmである。35～37・40の口縁部には打欠きが認められる。39は内面全体と口縁端部外面が煤ける。以上の杯身は底部を丸く仕上げ、口縁端部に凹面をつくるものが多い。回転ヘラケズリは丁寧で半分以上に及ぶが、口径は41が11.0cmである以外は10.5cmまでにおさまリ、小型化が進んだTK47型式に属するものと考えられる。43・44は高杯である。43は脚部三方に長方形スカシ孔を穿ち、器壁が薄い。44は脚部2方に長方形スカシ孔を穿ち、口縁部を打ち欠く。杯部は杯身と同様の特徴をもち、概ね同型式と考えられる。

### 3) 水溜状土壇(図15～17、図版6・7・17)

SE318 B1・C1区で検出した水溜状の土壇であり、井戸として機能したと考えられる。平面形は

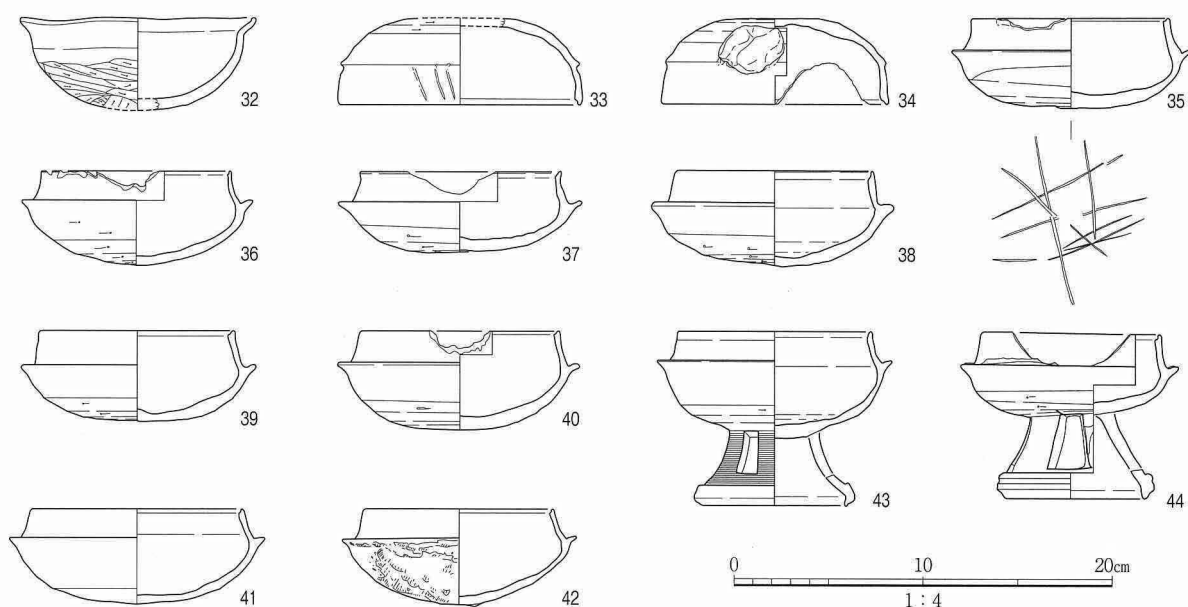


図14 SX317出土遺物

A地点(42～44)、B地点北(33・35)、B地点南(36～38)、C地点(34・39～41)

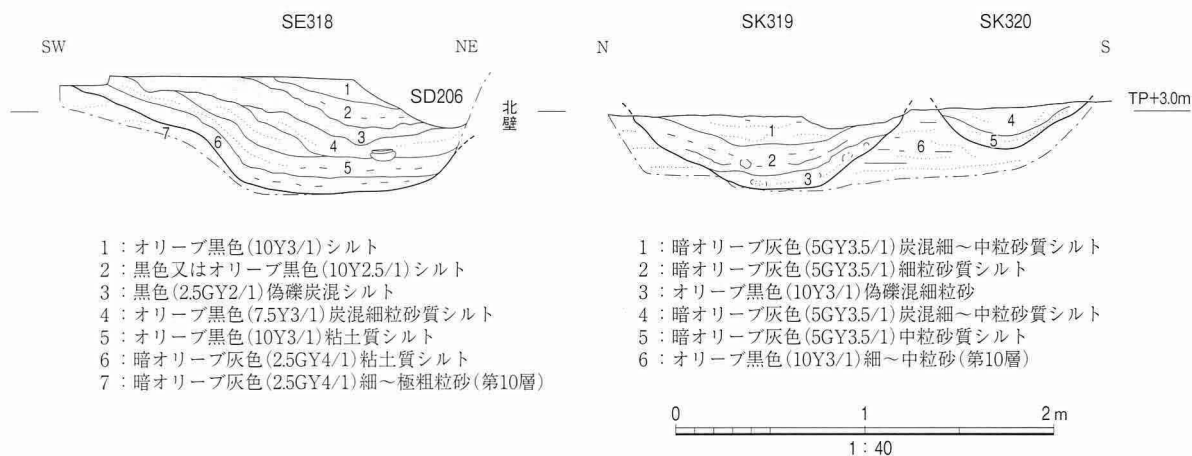


図15 水溜状土壌断面図

一辺2.7～3.0mの歪な隅丸方形で、一部調査区の北側に延びる。2段掘りとなっており、中央の水溜は長辺1.7m、短辺1.3m、検出面からの深さは0.6mである。埋土は粘土質シルトを主体とし、いずれもラミナが明瞭に確認できた。2～4層から土師器甕45・甑46、須恵器杯身50・高杯52が出土した。東肩近くには須恵器杯身51が置かれていた。また、暗色化した3層を土嚢袋3袋分洗浄したところ、白玉4個を検出した。

**出土遺物** 45は土師器甕である。外反する短い口縁部の端部をやや内湾させる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部は内外面ともハケのあと、ヨコナデで整える。46は甑である。平底で蒸気孔は中央に円を1つ、外周に楕円形を3個配する。口縁上端部は内傾する面を作り、内面をやや肥厚させる。体部外面は粗いハケ、内面下半はヘラケズリ、上半はナデで仕上げる。口縁部の内面上端の2cmほどに煤が付着する。47～52は須恵器である。47・48は杯蓋で、いずれも天井部の約8割に丁寧な回転ヘラケズリを施す。47は天井部が丸く、48は平坦である。完形品である前者には口縁部に打欠きは認められない。49～51は杯身で、口径はそれぞれ10.0cm、11.4cm、10.4cmである。49・51の底部は丸く、口縁端部に明瞭な凹面をつくる。49は器壁が薄く、底部全体に自然釉がかかる。口縁部には打欠きが認められる。50は胎土が粗く、稜は鈍い。51の底部に「×」のヘラ記号があり、他個体が溶着している。52は有蓋高杯で、脚部外面にカキメが施され、3方に長方形のスカシ孔がある。口縁部に打欠きが認められる。

以上の土器群は須恵器杯身の底部に丁寧な回転ヘラケズリを施しているものの、全体に稜がやや鈍く、小型化、口縁端部の明確な凹面の新しい要素から、概ねTK47型式に属するものと考えられる。

**SK319・320** E2・3区で検出した水溜状の土壌である。ともに平面形は長円形で、SK319は長辺1.9m、短辺1.3m、深さ0.4m、SK320は長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.2mである。埋土はSK319が下部に偽礫を含むものの、そのほかは細粒砂質シルト～中粒砂からなる自然堆積層である。SK319からは土師器甕、須恵器杯身が出土した。図17の55は須恵器杯蓋で、口径12.0cm、高さ3.6cmである。天井部は平坦で、肩が張る形態はTK208型式を彷彿とさせるが、口縁端部に明確な凹面を作り、古い特徴を残したTK23型式に属するものと考えられる。

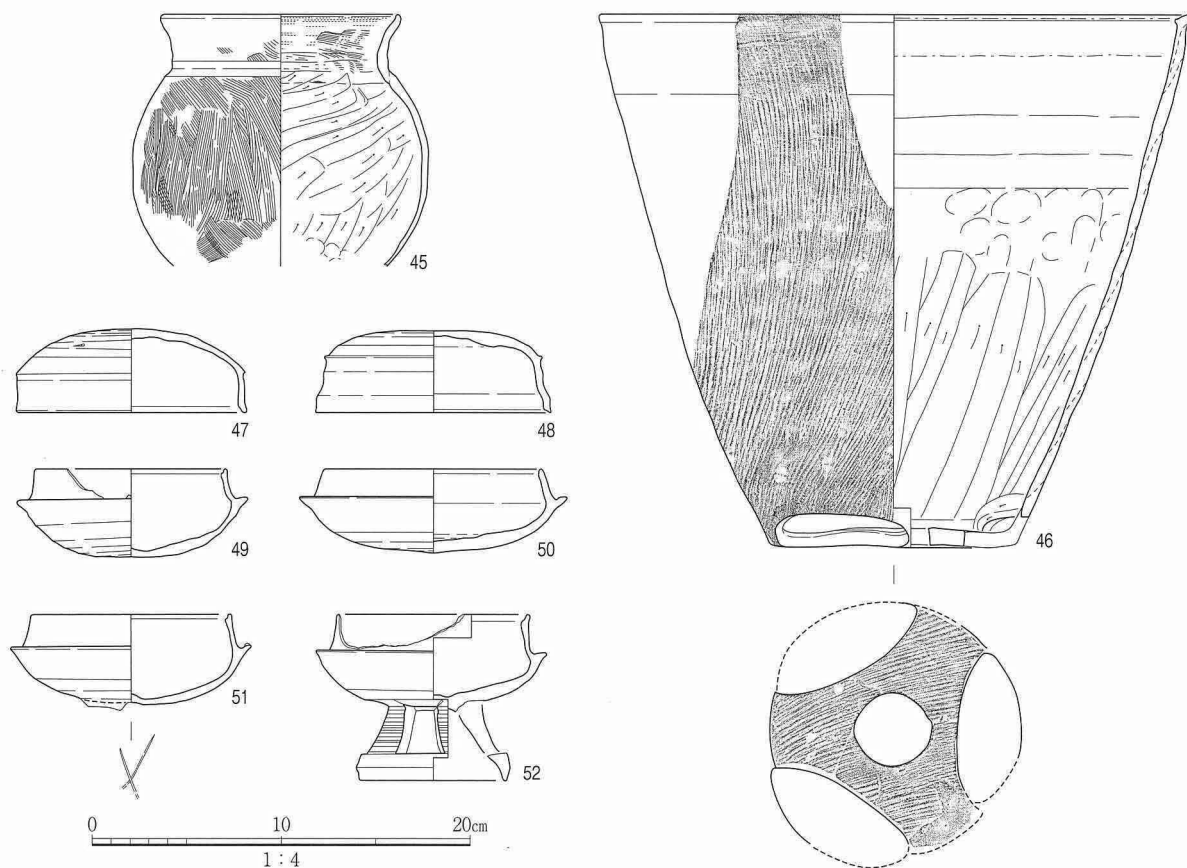


図16 SE318出土遺物

#### 4) そのほかの遺構・遺物(図9・17、図版7・17)

SK321 C1区で長辺1.5m、短辺1.3m、深さ0.2mの歪な長方形の土壇で、中央にまとまって土器が投棄されていた。出土遺物は土師器甕、須恵器杯身・甕、甕がある。56は完形品の須恵器杯身で、全体に焼け歪み、口径は9.9~10.7cmである。TK23~47型式に属する。

SD323 E1・F2区で検出された長さ8.0m以上、幅1.0m、深さ0.2mの溝である。SD211に切られる。古墳時代中期の土師器甕、須恵器壺・杯・高杯の小片が出土したが、SD211に先行する古代の溝である可能性もある。この溝以東は、古墳時代中期から奈良時代まで顕著な遺構はない。

製塩土器 SD208は古代の溝であるが、もともと下位にあったと考えられる古墳時代の製塩土器がまとまって出土した。総重量は840gある。図化した個体の重さは50~60gであり、これを基にするとおよそ10数個体分のボリュームとなる。2点を図化した。53はやや下膨れの丸底で、口径3.5cm、高さ7.6cmである。外面を平行タタキ、内面をナデで調整する。54は筒状の平底で、口径4.2cm、高さ6.9cmである。外面はタタキをナデ消し、内面はユビナデである。葺屋北遺跡の3期(TK23~47型式段階)に属する[藤田道子2010]。そのほか口径が大きめで、外面ナデ調整の破片が1点確認できる。

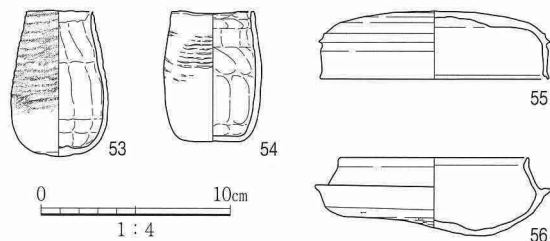


図17 SK319ほか出土遺物

SK319(55)、SK321(56)、SD208(53・54)

## 5)小結

掘立柱建物跡・柱穴は調査区の南壁・西壁近くに集中し、旧地形のより高い南西方向に集落の中心があることが窺える。F区以東は遺構・遺物がほとんどなく、集落の東端の一画が明らかとなった。祭祀の跡であることが明確なSX316のほかにも、SX317、SE318からも口縁部を打ち欠いた土器、滑石製臼玉が発見されており、この場が集落全体のなかで特別な意味をもっていることを示唆しているのかも知れない。

今回出土した土器はいずれもおよそTK23～47型式の段階におさまるもので、集落は5世紀末～6世紀初頭という限定された時期に営まれた可能性が高い。

### 第3節 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

飛鳥～奈良時代の遺構には、掘立柱建物・溝・土壇がある。このうち、調査区西部で格子状に交差する溝は、この時代の最も特徴的な遺構であり、遺物の大半も出土している。溝は基本的に第9層上面から掘削され、その排土である第8層上面を機能面とするが、多くは遺構の輪郭がより明確な第9層上面で検出した。

#### 1) 掘立柱建物跡・柱穴(図18・19、図版8・10)

SB201 C4・D4区で掘立柱建物の北辺柱列を2間分検出した。柱列の長さは掘形の中心で3.9m、柱間は1.95mである。主軸方向は正方位に対して、西に約6度振る。柱穴はいずれも方形で、一辺0.6m前後、深さはSP202が約0.5m、そのほかは約0.2mである。柱痕跡はSP202・204で確認でき、径はそれぞれ20cm、15cmである。出土遺物は土師器、須恵器の小片のみである。時期を判定し難いが、柱穴は飛鳥～奈良時代の溝群の排土に由来する第8層から掘削されている。SD206・207に挟まれた空間に配置されているようにもみえる。現段階では溝群から出土した土器である飛鳥Ⅱから平城宮土器Ⅱの時期幅で捉えておきたい。

#### 2) 溝(図19～22、巻頭図版、図版8・9・11・17)

溝群 調査区西側の東西27m、南北16mの範囲で、格子状に交差する溝を検出した。基幹となる溝は南北溝5～6条、東西溝3条で、規模は幅1.0～1.2m、深さは約0.3mである。南北方向の溝は西からSD205～208まで5.0～6.5mの幅で配される。方向は地形に沿うように、東に向かうにつれて、北西-南東方向への振れが大きくなる。最も東に位置するSD211はひときわ規模が大きく、幅2.0m、深さ0.4mである。東西方向の溝は北からSD217～219で、SD217・218間は約4.0m、SD218・219間は約6.5mである。以上の基幹的な溝については切合いが認められず、全体として有機的な関係をもち、同時に機能していたものと考えられる。

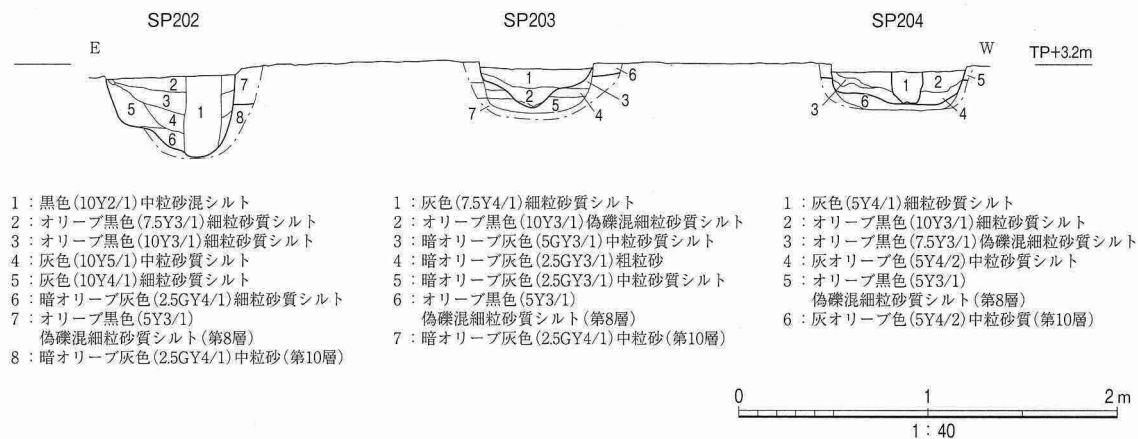


図18 SB201断面図

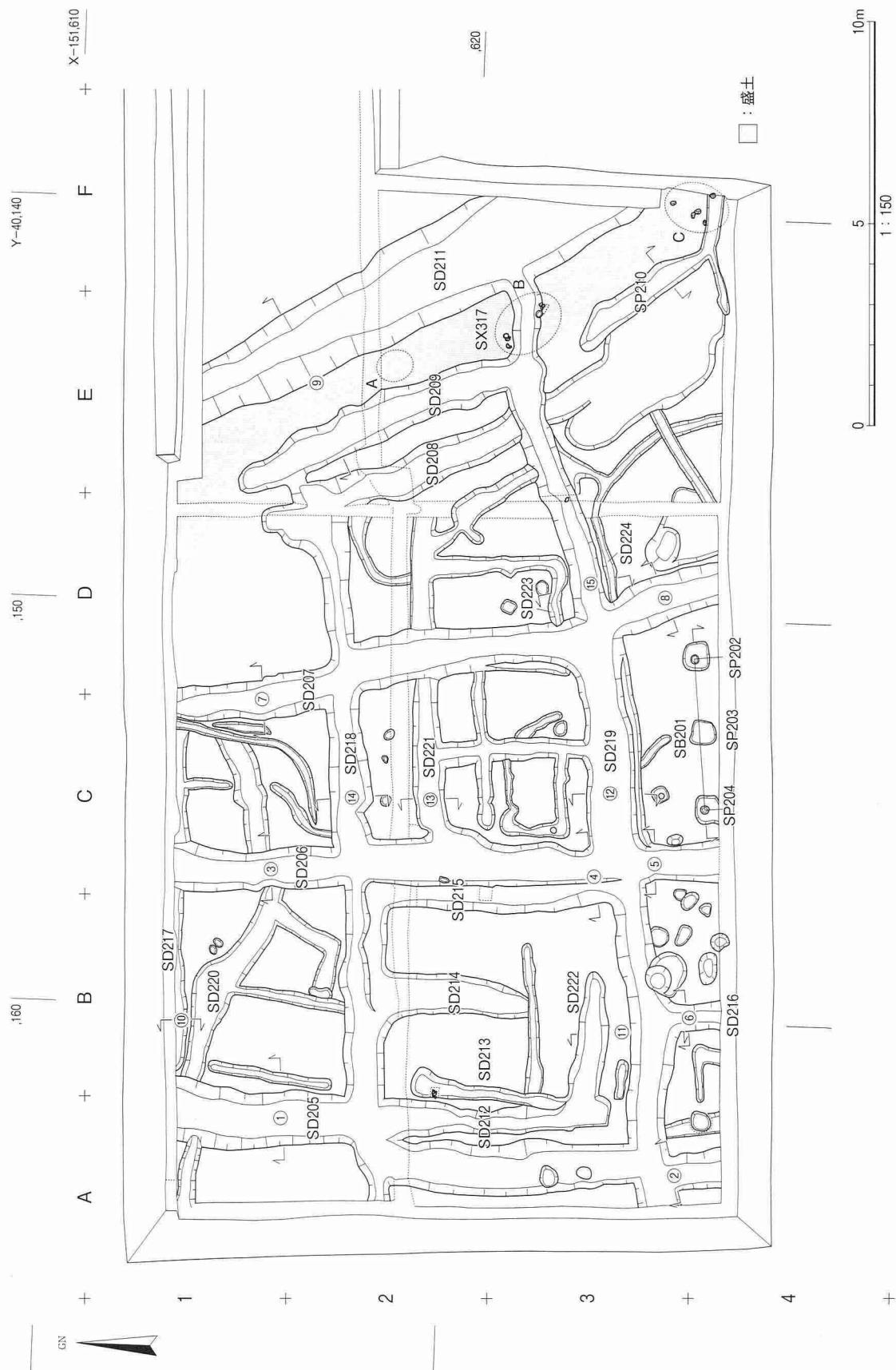


図19 飛鳥～奈良時代の遺構



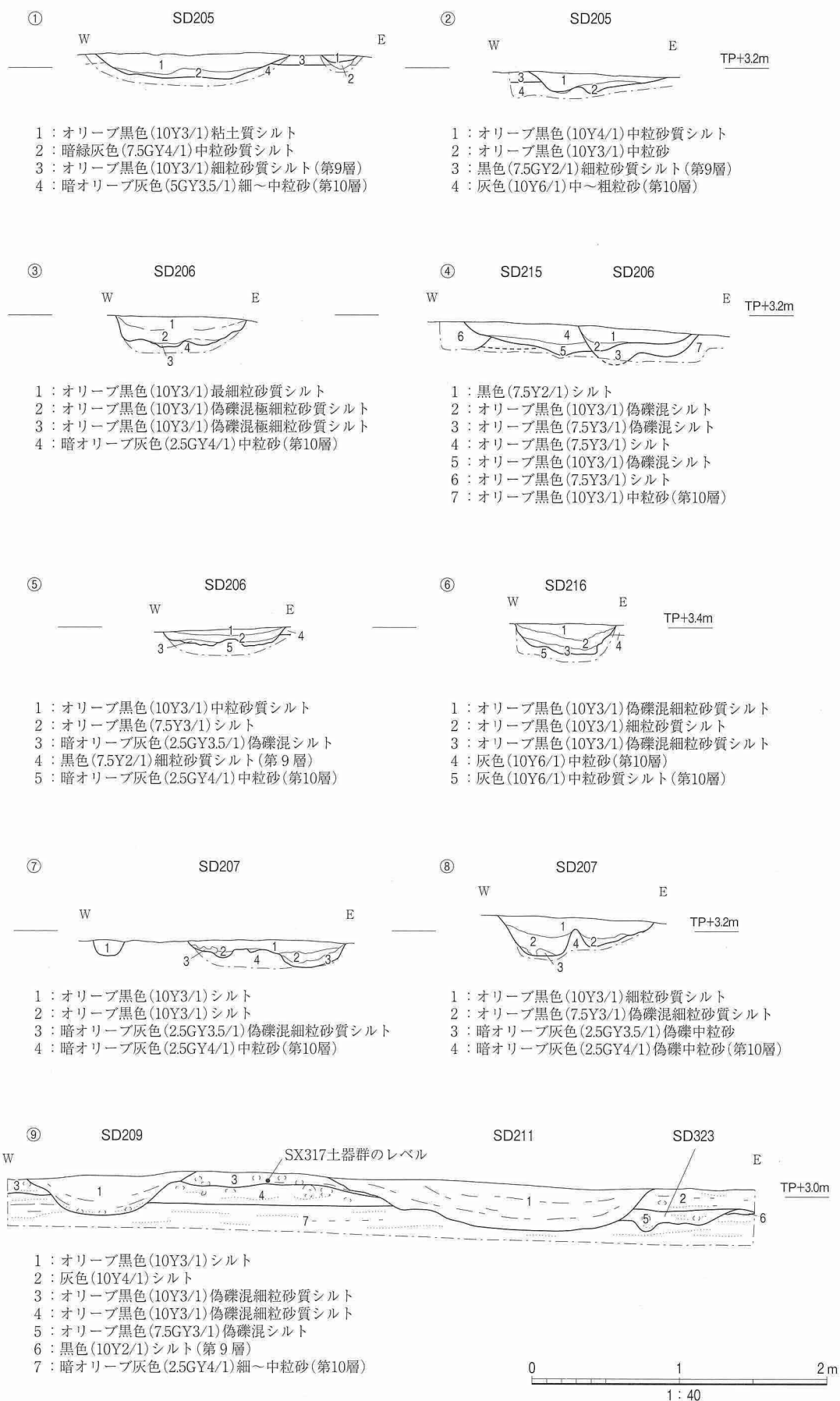


図20 飛鳥～奈良時代溝断面図(1)

これらの溝のなかにはSD205・206のように溝底の形状から2つの細い溝が縦走するように掘削された場合もあるが(図版11)、両者には明確な切合いが認められず、機能時には検出時と同様の幅を有していたものと考えられる。埋土は最下層に掘削時の偽礫を含むが、上位はオリーブ黒色最細粒砂質シルト～シルトを主体とする自然堆積層を基本とし、恒常的な流水を示す痕跡は確認できなかった。溝の深さは掘削面からほぼ一定で、溝底には大きな傾斜は認められない。また、幅0.5m以下の小規模な溝は基幹的な溝に先行するか、同時存在しており、後出するものはない。こうした状況から、これらの溝群はウェットな環境での耕作に際して、排水不良を解消するために掘削された可能性が高い。出土遺物は下層の古墳時代のものを多く含むが、溝の機能時、埋没時を示す資料としては、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・壺・甕・鉢、竈がある。以下、主要な溝について解説する。

SD205 A1～A3区にかけて検出した南北10m以上の溝で、幅は南側では0.9m、北側では1.3m、深さは0.2～0.3mである。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯A・B・H・Gがある(図22)。63・64は杯H蓋で、口径、高さはそれぞれ9.6cm、3.2cm、10.6cm、3.5cmである。天井部はヘラ切り後不調整で、

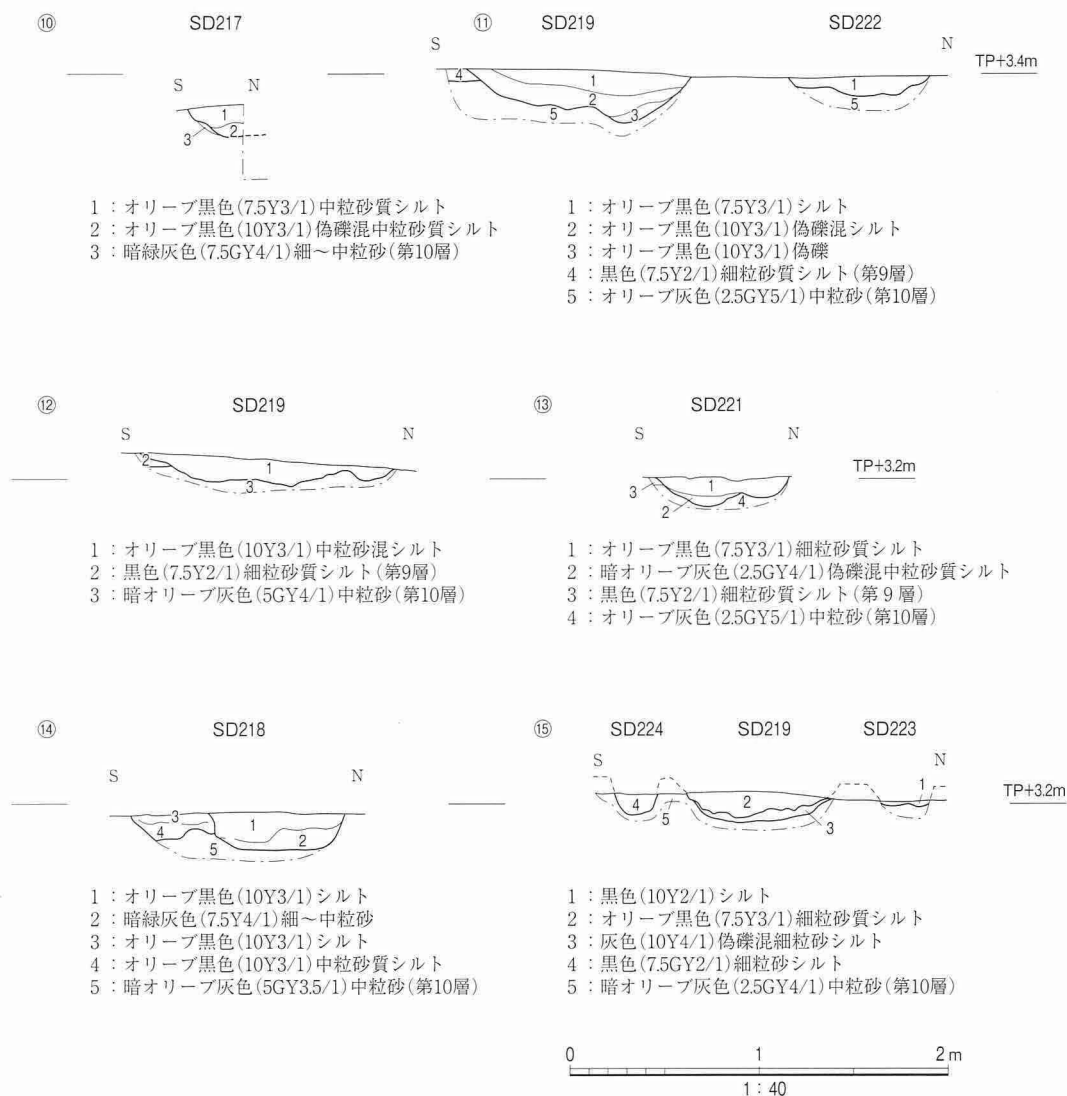


図21 飛鳥～奈良時代溝断面図(2)

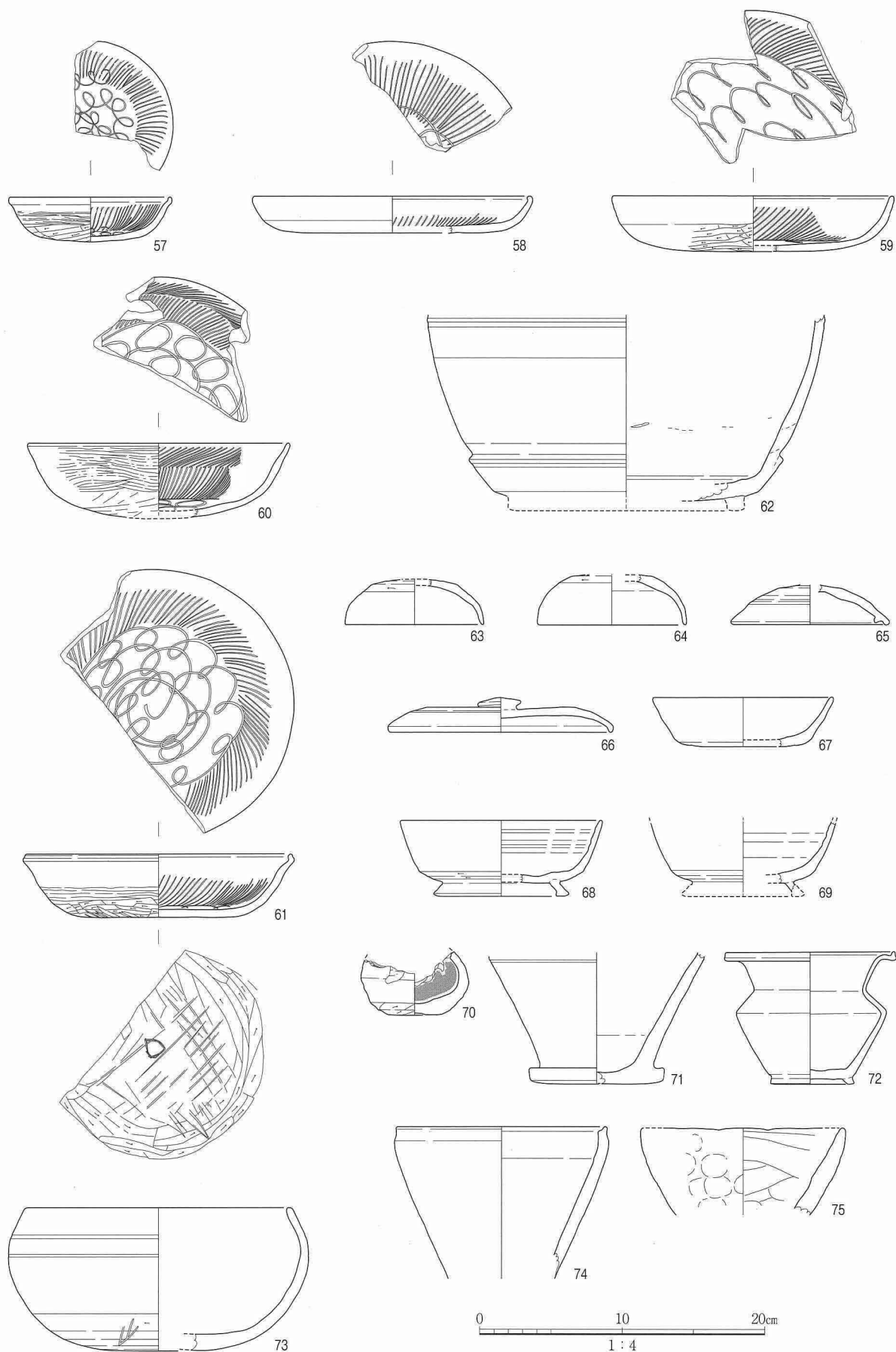


図22 飛鳥～奈良時代の出土遺物  
 SD205(63・65・67・69・74)、SD206(61)、SD211(60)、SD218(57)、SD219(58・59・66)、  
 第7層(62・72・75)、第8層(70・71・73)

この形式の最終形態に位置づけられる。65は杯G蓋で、口径10.6cmである。灯明皿に再利用されている。67は杯Aで、口径12.6cm、高さ3.5cmである。68・69は杯Bで、高台は底部のやや内側に取り付く。以上の土器はおよそ飛鳥Ⅱ～Ⅲのものと考えられる。74は逆円錐形をした土器で、口径14.6cmである。口縁部を内側に少し内傾させ、端部に凹面をつくる。現状では瓦質焼成に近く、器種は鉢であろうか。

SD206 C1～C4区にかけて検出した南北13.5m以上の溝で、幅1.0m前後、深さは0.2～0.3mである。埋土最上層から土師器杯A61が出土した(図版9)。61は口径18.0cm、径高指数25である。口縁は軽く外反し、端部を内側に強く曲げ、端面にシャープな稜をつくる。内面にラセン状、放射状暗文が巡る。底部外面は強いケズリが施される、口縁部下半はミガキ、上半はナデで仕上げる。飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅱに位置づけられる。

SD211 東端の溝で、座標北に対して約30度西に振る。幅は2.0m前後と他の溝よりも広く、境を画する機能をもったものと考えられる。出土遺物には土師器杯A・羽釜・甕がある。60は杯Aで、口径18.2cm、径高指数は29である。口縁端部は丸くおさめる。外面は底部を軽いケズリ、口頸部を丁寧なミガキで仕上げる。内面にラセン状暗文、右上がりの2段放射状暗文を巡らし、飛鳥Ⅴに属する。

SD218 A2～D2区で検出した19m以上の東西溝で、東端はSD208に取り付く。幅0.5～1.0mで、深さは0.3m前後である。出土遺物には土師器杯C・甕、須恵器杯A・B・壺・甕、竈がある。57は杯Aで、口径11.2cm、径高指数28である。口縁は軽く外反し、端部を内側に丸くおさめる。内面にラセン状、放射状暗文が巡り、飛鳥Ⅴに属する。

SD219 A3～E3区で検出した23m以上の東西溝で、東端はSD211に取り付く。幅0.7～1.5m、深さは0.3m前後である。出土遺物は土師器杯C・皿A・高杯、須恵器杯B・Gがある。58は皿Aである。口縁端部を丸く内側におさめる。底部内面にラセン文、放射状暗文をもつ。径高指数は13.5である。59は杯Cである。口径19.5cm、径高指数は20である。口縁端部はまっすぐやや外方に伸び、内面には三重のラセン文、右上がりの放射状暗文が巡る。底部外面はケズリ、口縁部はヨコナデで調整する。以上の土器は、概ね飛鳥Ⅴ～平城宮土器Ⅱに位置づけられる。

以上の溝群から出土した遺物は飛鳥Ⅱ～平城宮土器Ⅱまでの幅がある。いずれの時期の遺物も少量であり、その評価が難しいが、現段階ではこれらの時期が溝群の掘削から機能、埋没の期間を示すものと考えておきたい。

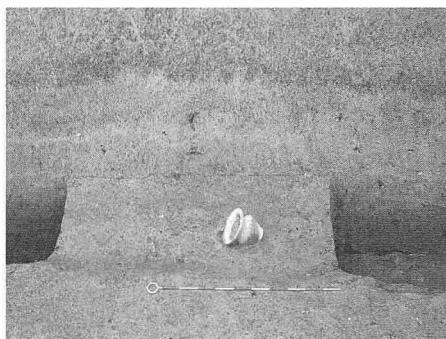


写真3 第7層から出土した壺72

### 3) 包含層出土の遺物(図22、図版17・18)

ここでは遺構から出土しなかった特徴的な器種を取り上げる。62は底径18.5cmの高台のつく大型の土師器である。腹部に2条以上の沈線、底部近くに幅3.0cmの粘土帯を巡らす。外面の大半を回転ヘラケズリ、内面はナデで調整する。内外面に薄く煤が付着する。火入れの類であろうか。70～73は須恵器である。70は□である。頸部が細くしまり、口縁部が大きく開く、飛鳥時代の最終的な形態と考えられる。内面に漆

が付着する。71は鉢Fで、底径9.2cmである。72は壺Hで、口径11.8cm、高さ9.4cmである。色調は灰白色を呈し、やや軟質である。D4区第7層から出土した完形品であり、埋納品の可能性も検討したが、遺構や掘形を確認することはできなかった(写真3)。73は鉢で、口径18.2cm、高さ10.0cmである。口縁は内湾し、胴部に2条の沈線をもつ。底部は平底に近く、ヘラ記号をもつ。75は鉢形の製塩土器で、口径14.0cmである。外面はユビオサエ、内面はナデで仕上げる。積山編年の6a類にあたり、奈良時代のものであろう[積山洋1993]。

#### 4)小結

溝群からは飛鳥時代中頃から奈良時代初め頃の遺物が出土した。その性格は明確でないものの、遺物量が少なく、耕作に関連する可能性が高い。一方、調査区南端ではSB201を検出し、居住域が南方に広がっていることが窺える。調査区は当時の活動域の東端とともに、居住域と耕作域の境界にあたる可能性がある。

## 第4節 中世の遺構と遺物

### 1) 水田・畦畔・溝・踏込み(図23、原色図版3、図版12)

F区以東、調査区東端までの第6層上面で、第5-2層の作土とそれに伴う畦畔を確認した。

SR103 H1・2区で検出した畦畔で、幅2.5m、最大高0.4mである。座標北に対して約17度西に振る。

SR104 N1・2区で検出した畦畔で、幅2.5m、最大高0.4mである。座標北に対して約1度西に振る。

SD105 N1・2区で検出した第7層の踏み込みで、幅1.1m、深さ0.2mの溝状を呈する。座標北に対して約42度西に振る。

SD106 N1・2～O1・2区で検出した溝で、幅2.5m、深さ0.2mである。埋土はシルト質粗粒砂を主体とし、座標北に対して約42度西に振る。

平面的には検出できなかったが、E区以西では掘上げ田造成の盛土下に畦畔状の高まりSR102が北壁の断面で観察できた(図6・原色図版4)。SR103・104と一連の水田畦畔と考えられ、水田から掘上げ田へ移行した状況が窺える。第5-2層では遺物が確認できなかったが、掘上げ田の造成直前で、第3-2・4層の12~13世紀に近い時期である可能性が高い。

### 2) 掘上げ田(図23、原色図版3、図版13)

調査区西側の第4層上面で検出された。盛土によりかさ上げされた耕作面(凸部)と掘潰れ(凹部)、築堤からなる。全体的にはNR101前身の流路に面して、櫛歯状に南北に延びる形態が想定される。中央の掘潰れは西辺が長い短冊形を呈し、上端で南北7.5~9.0m、東西11.0m、下端で南北5.0~7.0m、東西9.5m、南部の掘潰れは上端で東西7m以上、南北5m以上である。耕作面の北東隅はNR101によって削られている。掘潰れの東で検出された島状の高まりは、干拓のさいに沼沢地への水の流入を遮断あるいは迂回させるための築堤と考えられる。規模は上端で幅1.5~2.0m、長さ7.5m以上、下端で幅3.0~3.5m、長さ8.5m以上で、耕地との間に設けられた水口は上端で1.7m、下端で0.5mである。

耕作面および築堤の高さは現況でそれぞれTP+3.8m前後、TP+4.0m前後で、中央の掘潰れ(TP+3.3m)、南部の掘潰れ(TP+3.4~3.5m)との高低差は、0.5~0.6mである。耕作面の東端には畦畔が設けられ、数度の盛土により、かさ上げされている状況をD区の北壁断面で確認することができた(図6)。掘潰れには泥(第3-3・4層)および洪水砂(第3-2層)が堆積し、最下層の第3-4層からは奈良時代以前の遺物のみが出土し、第3-3層からはまったく遺物が確認できなかった。作土である第4層の遺物はほとんどが奈良時代以前のものであったが、少量の瓦器片を検出した。76は和泉型の瓦器碗で、小破片で詳細は不明だが、内外面とも比較的密にヘラミガキされており、およそ12世紀代のものと考えられる。掘上げ田を覆う洪水砂層(第3-1層)上部からは、13世紀代の土師器羽釜が出土しており、掘上げ田の活動時期は、およそ12~13世紀にあるものと考えられる。

### 3) 自然流路(図23・24、原色図版3、図版14)

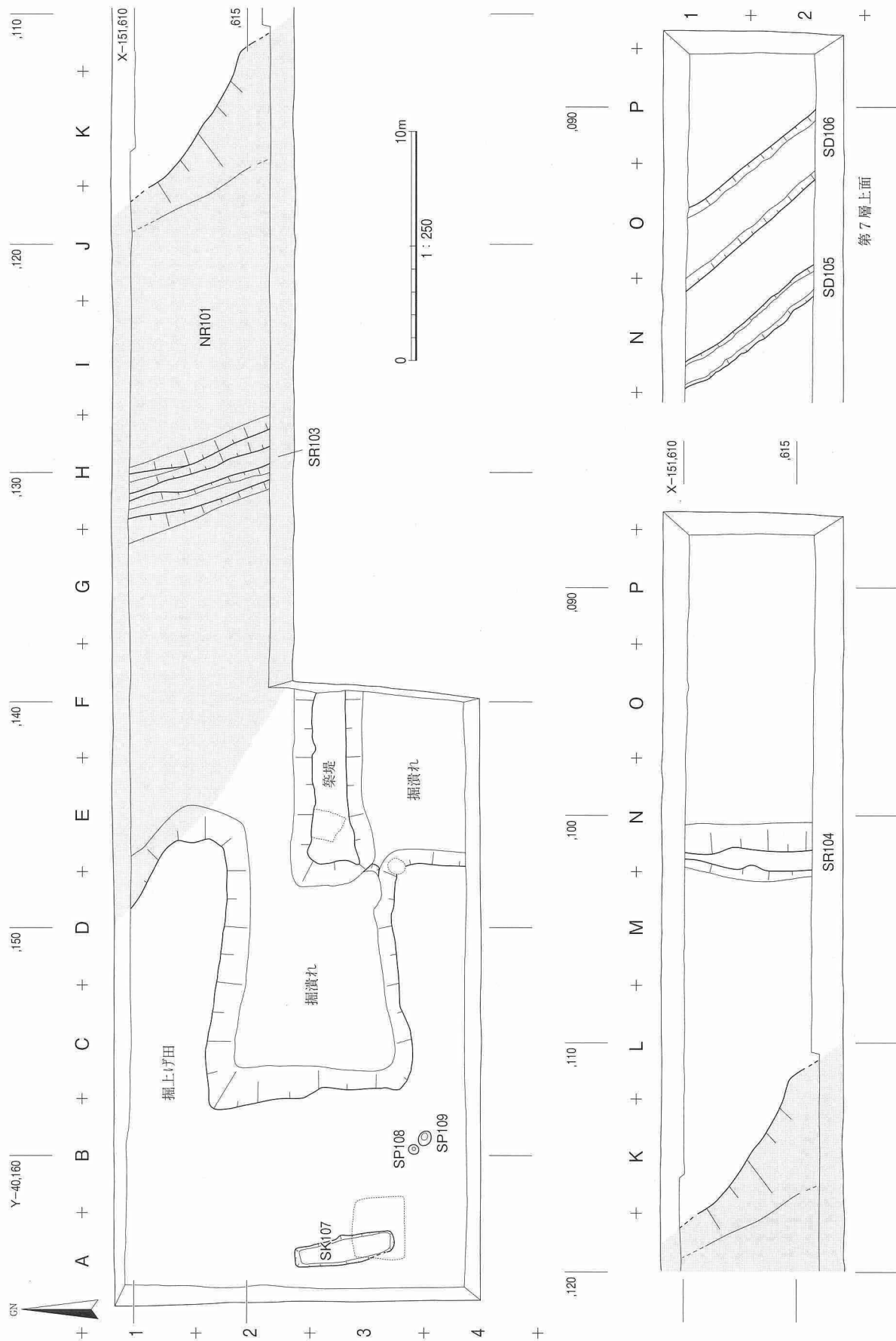


図23 中世の遺構



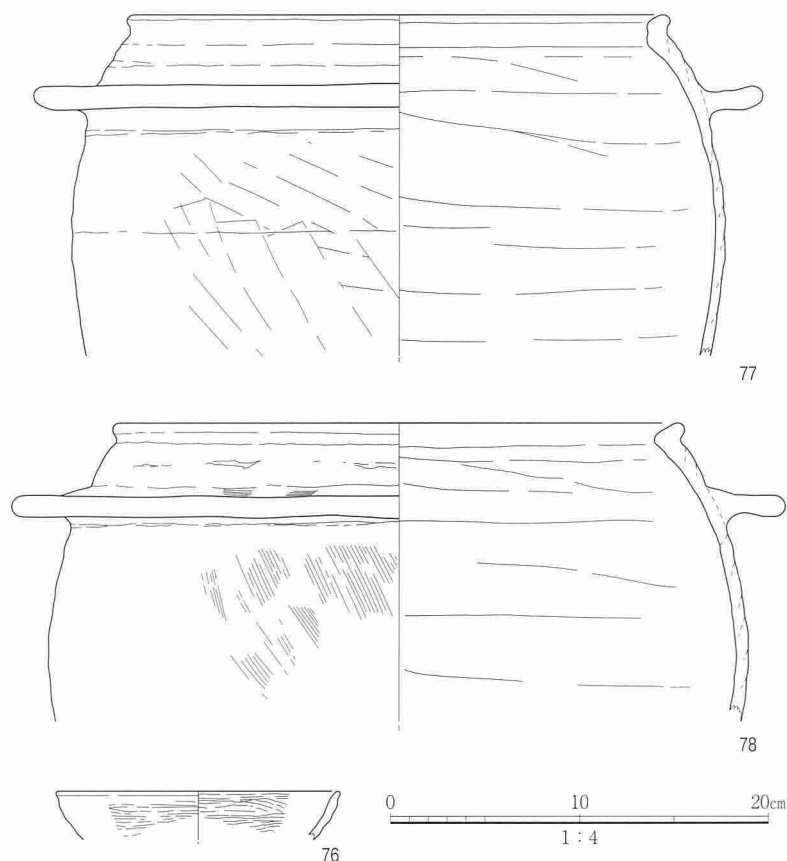


図24 中世の出土遺物

第4-1層(76)、NR101(77・78)

NR101 調査区中央部D～K区の第3-2層上面検出された南東-北西方向の自然流路である。幅約30m、深さは最深部で0.9mである。埋土は粗粒砂を主体とし、トラフ型斜交ラミナが発達し、古流向はおおむね南東から北西である。出土遺物には古代以前の遺物のほか、瓦器碗の細片、土師器羽釜があり、このうち羽釜77・78はH1区の埋土最上部から密集して出土した。いずれも、玉縁状のごく短かい「く」の字形に外反する口縁部を持ち、端部を丸くおさめる。77は胴部外面をケズリ、ナデで調整する。78は外面をハケ、

内面をナデで調整する。河内B1型[菅原正明1983]に属し、13世紀代に位置づけられる。

#### 4) 土壌・小穴(図23、図版14)

SK107 A2・3区で検出された長さ4.2m、最大幅1.2m、深さ0.8mの長方形を呈する大型の土壌である。埋土は偽礫を多く含む粗粒砂質シルトを主体とする埋戻し土で、瓦器碗の細片が出土した。

SP108 一辺0.5mの隅丸方形を呈する土壌である。深さは0.5mで、埋土は下部が灰色シルト、中部が粗粒砂の自然堆積層で、上部は偽礫を含むオリーブ黒色粘土質シルトからなる埋戻し土である。

SP109 長辺0.6m、短辺0.5mの歪な方形をした柱穴である。深さは0.3mで、埋土はオリーブ黒色粗粒砂質シルトを主体とする埋戻し土である。

#### 5) 小結

奈良時代中期以降、調査地は湿地化し、新たな開発が始まるのは中世の段階であるようである。畦畔・作土が検出され、全域で水田化している。しかし、NR101の存在から想定されるように、絶えず水に晒される低湿地環境にあり、掘上げ田へと移行したものと考えられる。その後、東と南東からの洪水砂に見舞われ、これらは埋没し、この地の景観は大きく変化した。

## 第Ⅳ章 まとめ

今回の調査の意義は未知の遺跡が発見され、そのおおよその内容が初めて判明したことである。調査成果の要点は次のとおりである。

### 1)古墳時代

調査区西部を中心に、古墳時代中期末(5世紀末～6世紀初頭)に属する、掘立柱建物・井戸・祭祀関連遺構などが検出された。集落の中心はより地形の高い調査区の南西にあることが予想される。一方、地形の低い中央以東はほとんど遺構・遺物が見られず、今回の調査区は集落の東の周縁に当るものと考えられる。SX316では口縁部を打ち欠いた食器系の土器、底部を穿孔した甕とともに800個を超える滑石製白玉が見つかり、祭祀が行われたことが明らかとなった。SX317やSE318から出土した土器にも、口縁部を打ち欠くものが多く、祭祀的要素が濃厚である。出土した土器はいずれもTK23～47型式に属し、集落は限られた時期に営まれたものと考えられる。

### 2)飛鳥～奈良時代

7世紀中頃の飛鳥Ⅱ～Ⅲの土器が、当地の再開発の時期を表すものと考えられる。さらに飛鳥Ⅴから平城宮土器Ⅱ頃の遺物が調査区西部で格子状に交差する溝から出土している。SD211以東は、ほとんど遺構・遺物がなく、その活動の範囲はかつての古墳時代集落の東限がほぼ踏襲された状況が窺える。溝群は低湿地における耕作に関わる遺構の可能性が高い。SB201の存在から、調査区の南部には居住域が広がっている可能性が高い。

### 3)中世

奈良時代以降、中世以前の出土資料は確認できず、この地で人間活動が再開されるのは中世になってからのようである。まず水田の開発がおこなわれ、その後、低湿地環境への対応から、掘上げ田が造成された。出土遺物が乏しく、開始時期の特定は難しいが、掘上げ田の作土からは12世紀代の瓦器碗、掘上げ田を覆う洪水砂層からは13世紀代の土師器羽釜が出土しており、耕作時期の一端を示している。その後、洪水砂に見舞われ、掘上げ田は放棄され、近世に再び耕地化されるまで、顕著な活動は確認できない。

## 引用文献

- 井上正雄1922、『大阪府全志』巻之四 大阪府全志発行所
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、『天理教大阪分教会建設に伴う林寺遺跡発掘調査(HY00-1)報告書』：『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73-77
- 大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』
- 2002、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2003a、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 2003b、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2009、『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』
- 大阪文化財研究所2011a、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 2011b、『平野馬場遺跡調査報告』
- 京嶋寛1992、『第2節 古墳時代後半期における土師器の器種構成』：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ』、pp.187-200
- 国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 小谷利明2005、『守護所正覚寺』『正覚寺合戦』：『平野区誌』 平野区誌刊行委員会、pp.94-99
- 小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 菅原正明1983、『畿内における土釜の製作と流通』：『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、同朋舎
- 積山洋1993、『律令制期の製塩土器と塩の流通—撰河泉出土資料を中心に』：『ヒストリア』第141号、大阪歴史学会、pp.69-92
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 辻美紀1999、『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』：『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』、pp.351-365
- 豆谷浩之1996a、『古代の加美遺跡—出土したさまざまな遺物をめぐって—』：大阪市文化財協会編『葦火』64号、pp.4-5
- 1996b、『加美遺跡で出土した古代の絵馬』：大阪市文化財協会編『葦火』65号、pp.4-5
- 森毅2005、『平野環濠都市遺跡の成立』：『平野区誌』 平野区誌刊行委員会、pp.82-83
- 藤田道子2010、『葦屋北遺跡出土の製塩土器の一考察』：榮原永遠男編『日本古代の王権と社会』、pp.85-101
- 文化庁文化財部記念物課2010、『第1節 遺跡における土層の認識』：『発掘調査の手引き—集落遺跡発掘編—』、pp.94-

**The Excavation Report  
of  
the Kami-shokakuji Site  
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization  
Osaka City Cultural Properties Association

## Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB: Building

SD: Ditch

SE: Well

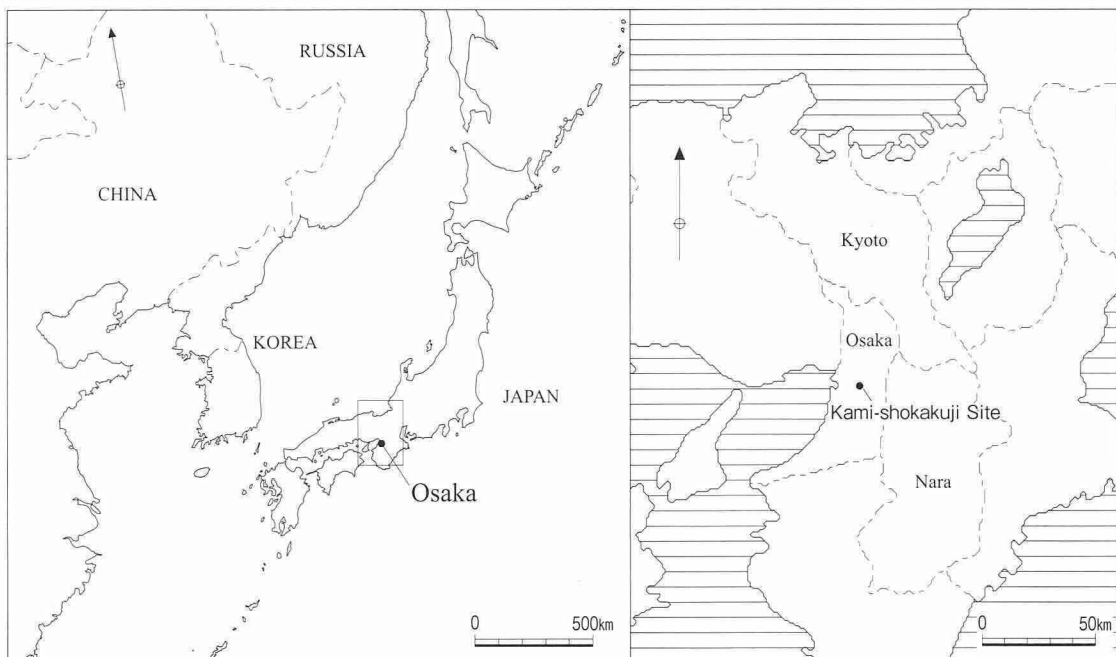
SK: Pit

SP: Posthole

SR: Baulk for paddy fields

SX: Ritual or other Features

NR: Natural stream



# CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Geographical and historical setting of the site .....	1
Chapter II Background and progress of the research .....	5
1) Background to this research .....	5
2) Progress of research and reporting .....	5
Chapter III Investigation results .....	7
1 Stratigraphy .....	7
2 Features and finds from the Middle Kofun Period .....	11
1) Buildings and postholes .....	11
2) Features associated with rituals .....	13
3) Well .....	17
4) Other features and artifacts .....	19
5) Conclusion .....	20
3 Features and finds from the Asuka-Nara Periods .....	21
1) Buildings and postholes .....	21
2) Ditches .....	21
3) Other finds .....	26
4) Conclusion .....	27
4 Features and finds from the Medieval Period .....	28
1) Paddy fields .....	28
2) Raised paddy fields .....	28
3) Natural stream .....	30
4) Pits .....	30
5) Conclusion .....	30
Chapter IV Conclusion .....	31
1) The Kofun Period .....	31
2) The Asuka-Nara Periods .....	31
3) The Medieval Period .....	31
References and bibliography .....	32

English contents

## ENGLISH SUMMARY

The Kami-shokakuji site is located in the Kami-shokakuji district of Hirano Ward, in southern Osaka City (Fig.1-3). This was the first excavation undertaken prior to the construction of a public flat, conducted from early October to late December, covering 850 square metres. This excavation resulted in the discovery of a new site, and brought its general contents to light. The main results are summarized chronologically as follows.

### 1) Kofun Period

Embedded pillar structures, wells, and ritual features all dating to the end of the Middle Kofun Period (end of 5th century to beginning of 6th century) were found centered on the southwestern part of the excavation area. The center of the settlement is thought to be on the higher ground southwest of the excavation area. In contrast, hardly any features or artifacts were recovered from the lower ground on the east side of the excavation area, so it is thought that the excavation area lies on the eastern edge of the settlement. Pottery tableware with deliberately broken rims, pots with holes opened in the base, and more than 800 talc mortar-shaped beads were found in SX316 (Pl. 4), showing clearly that rituals were conducted there. There were also many dishes with deliberately broken rims among the artifacts recovered from SX317 (Pl. 5) and SE318 (Pl. 6), showing those features' rich ceremonial aspects. All the pottery found belongs to the period from TK23 to TK47, so the settlement is thought to have been occupied for a limited time.

### 2) Asuka to Nara Periods

Asuka II to III pottery from the mid-7th century shows a period of redevelopment in this area. Furthermore, artifacts belonging to the period from Asuka V to Heijo Palace Pottery II were found in ditches forming a lattice pattern in the western part of the excavation area (Pl. 8 & 9). From SD211 eastward, hardly any artifacts or features were found, showing that the boundaries for this later activity were nearly in accordance with the eastern edge of the earlier Kofun period settlement.

### 3) Medieval Period

No material from the middle of the Nara Period to the beginning of the Medieval Period could be confirmed. It seems that it was not until the Medieval Period that human activity in this area resumed. First, rice paddies were developed, and then raised paddy fields that were more suited to the low, wet land were constructed (Pl. 12 & 13). Few artifacts were recovered, making it difficult to assign a date, but 12th century Ga ware bowls were found in the surface soil of the raised paddy fields, and the layer of flood-deposited sand covering the fields contained 13th century Haji ware flanged kettles, showing the end of this period of the lands' agricultural use. After that, more flood sands were deposited, the raised paddy fields were abandoned (Pl. 14), and significant use of the land could not be confirmed until its reuse for agriculture in the pre-modern period.



## 報告書抄録

ふりがな	かみしょうかくじいせきはつつちょうさほうこく							
書名	加美正覚寺遺跡発掘調査報告							
編著者名	岡村勝行							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみしょうかくじ 加美正覚寺 遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 かみしょうかくじ 加美正覚寺3丁目	27126	-	34° 37' 57"	135° 33' 43"	20101004 ～ 20101228	850㎡	遺跡内容の確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
加美正覚寺 遺跡	集落	古墳時代中期		掘立柱建物・井戸・ 祭祀関連遺構		土師器・須恵器・製塩土器・白玉		
	集落・生産域	飛鳥～奈良時代		掘立柱建物・溝		土師器・須恵器・製塩土器		
	生産域	中世		水田・掘上げ田		瓦器・土師器		
要約	<p>本書は加美正覚寺遺跡において初めて実施した発掘調査の成果報告である。</p> <p>3つの時代の遺構・遺物を検出した。まず、古墳時代中期末では集落跡があり、掘立柱建物、井戸と思われる水溜状遺構のほか、祭祀関連の遺構が発見された。次に飛鳥～奈良時代では、耕作に関連すると思われる格子状に交差する溝、掘立柱建物などがある。以上の遺構は調査区中央以東には拡がらず、調査区は集落の東端にあたると考えられる。中世では水田跡、掘上げ田を検出した。本遺跡の概要が初めて明らかになる成果が得られた。</p>							



# 原 色 図 版







調査地とその周辺(南東から)



古墳時代の遺構(南から)







SX316遺物出土状況(北から)



SX316出土遺物





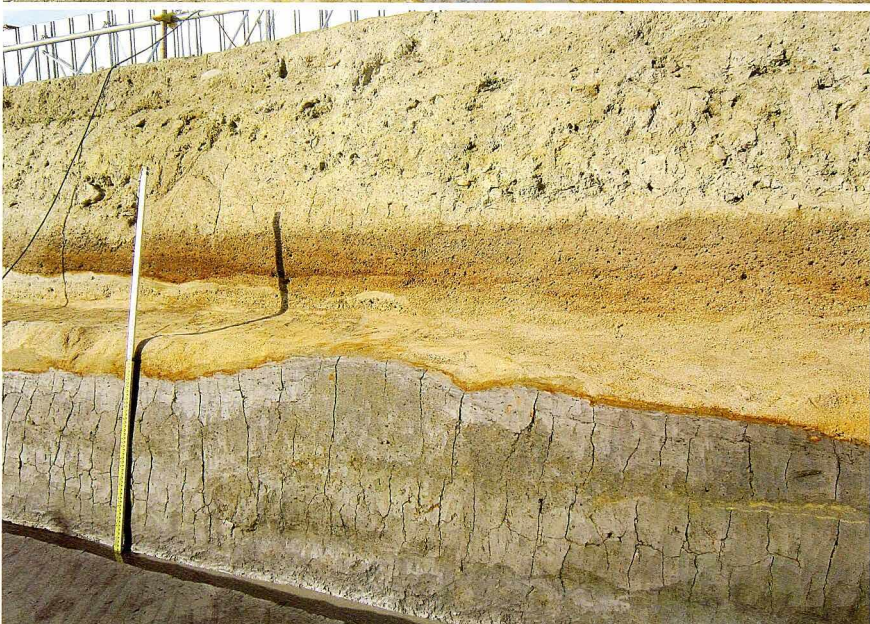
掘上げ田検出状況  
(南西から)



NR101検出状況  
(北西から)



水田畦畔SR103







西壁(A2区)



北壁(A1～F1区)



北壁(K1～P1区)





# 図 版







第10層上面遺構群(西から)



第10層上面遺構群西部(北から)

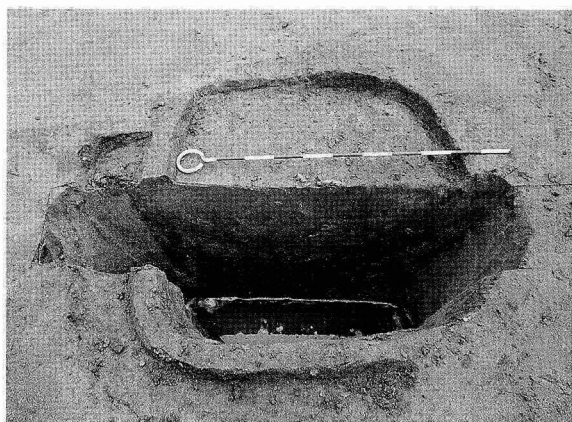


第10層上面遺構群中央部(南から)

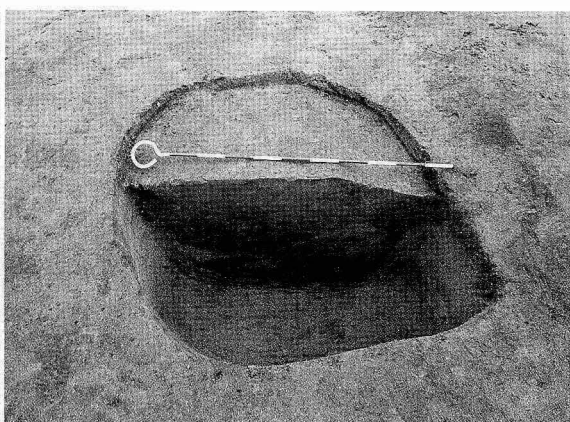


SB301検出状況(南西から)

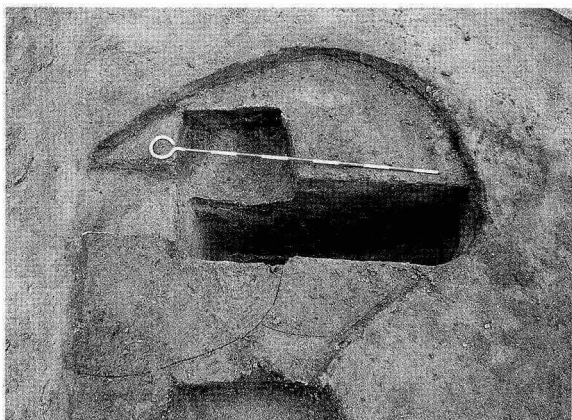




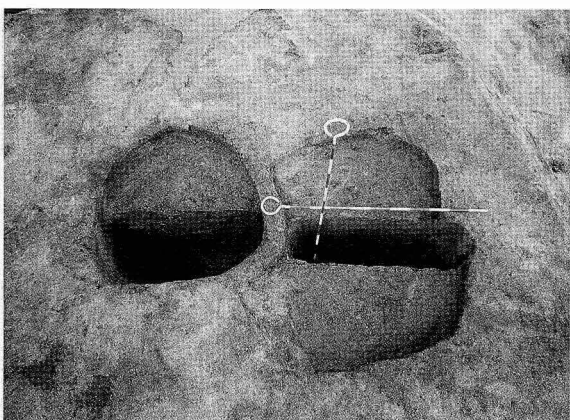
SP302(東から)



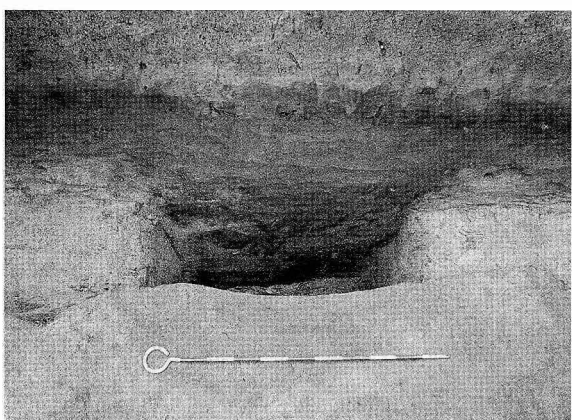
SP303(東から)



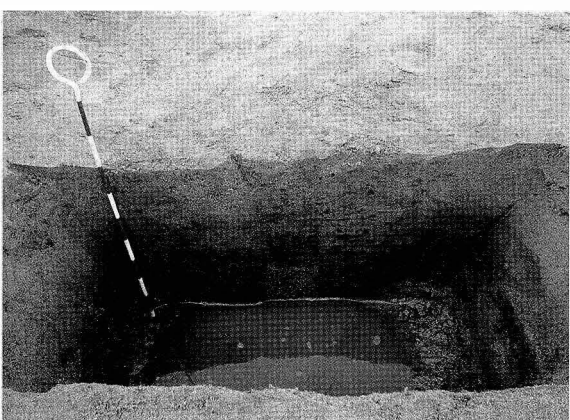
SP304(東から)



SP305・306(南東から)



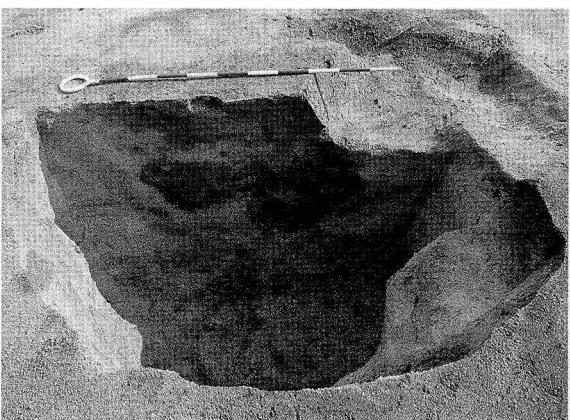
SP311(東から)



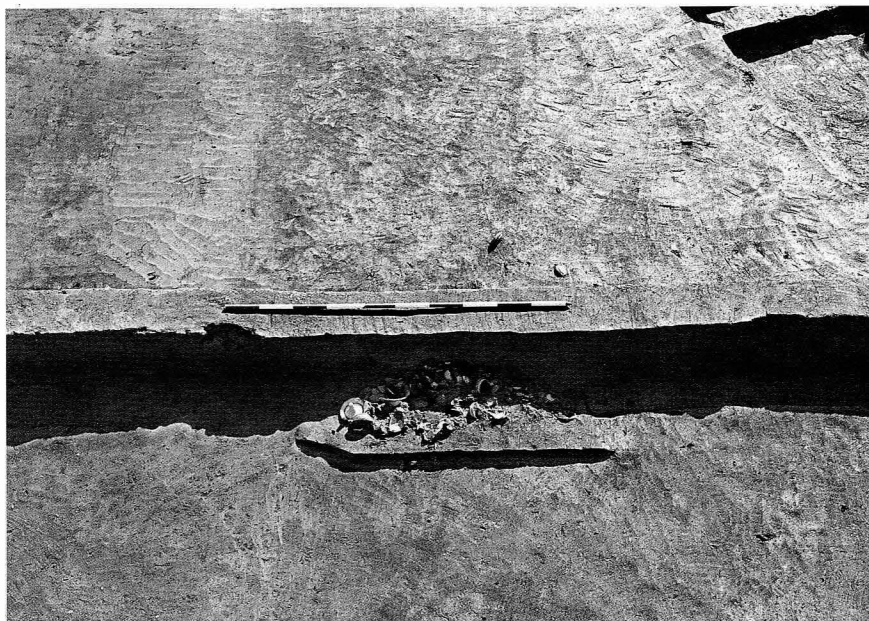
SP312(南東から)



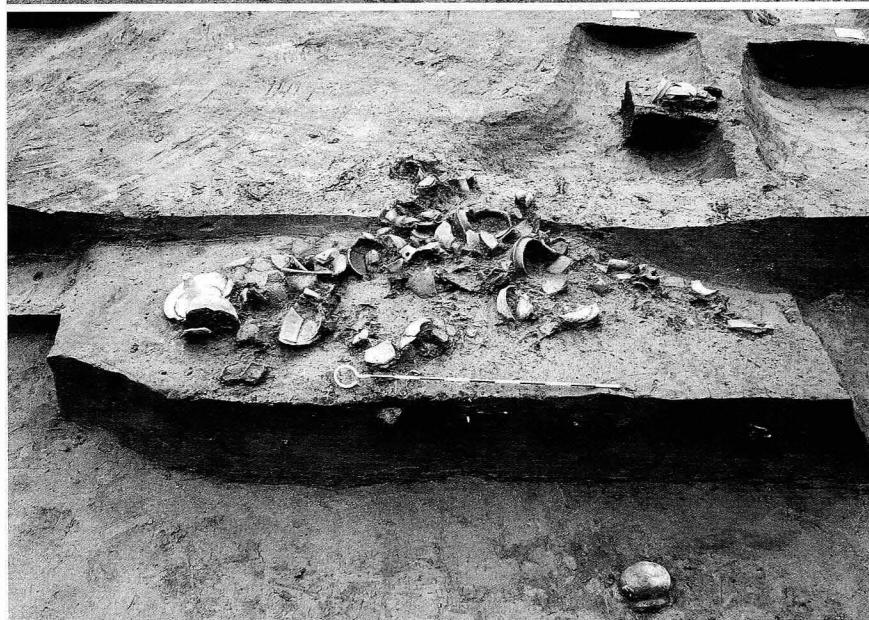
SP313(東から)



SP314(西から)



SX316と古代溝（未掘）の関係  
（北から）



SX316検出状況  
（北から）



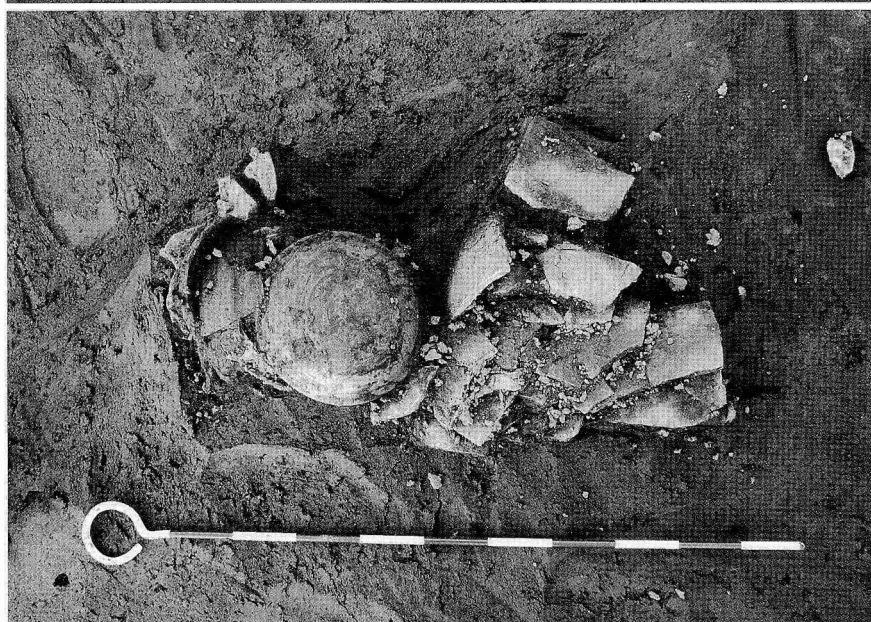
SX316遺物出土状況  
（北から）



SX317遺物出土状況  
B地点北(北から)

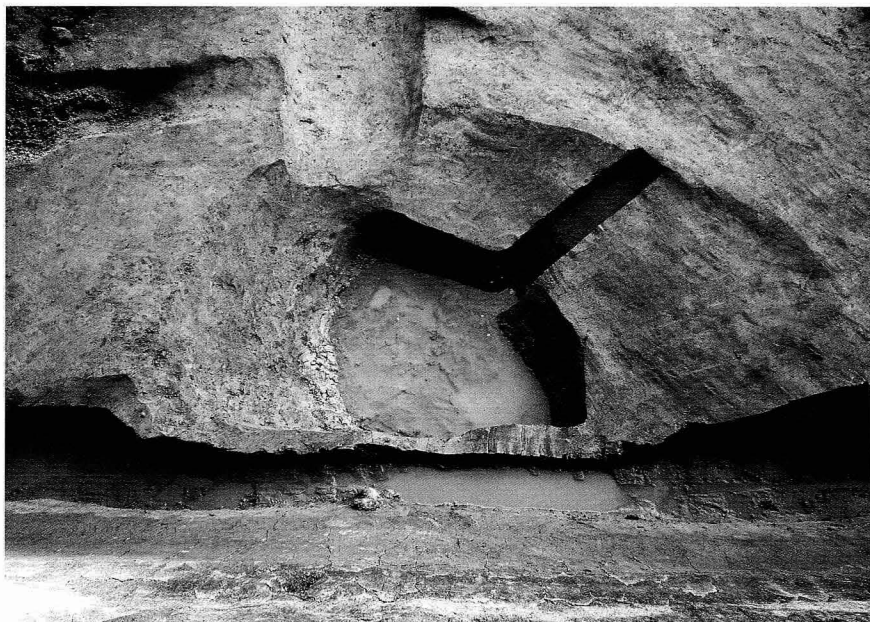


SX317遺物出土状況  
B地点南(南西から)



SX317遺物出土状況  
C地点(北西から)





SE318(北から)



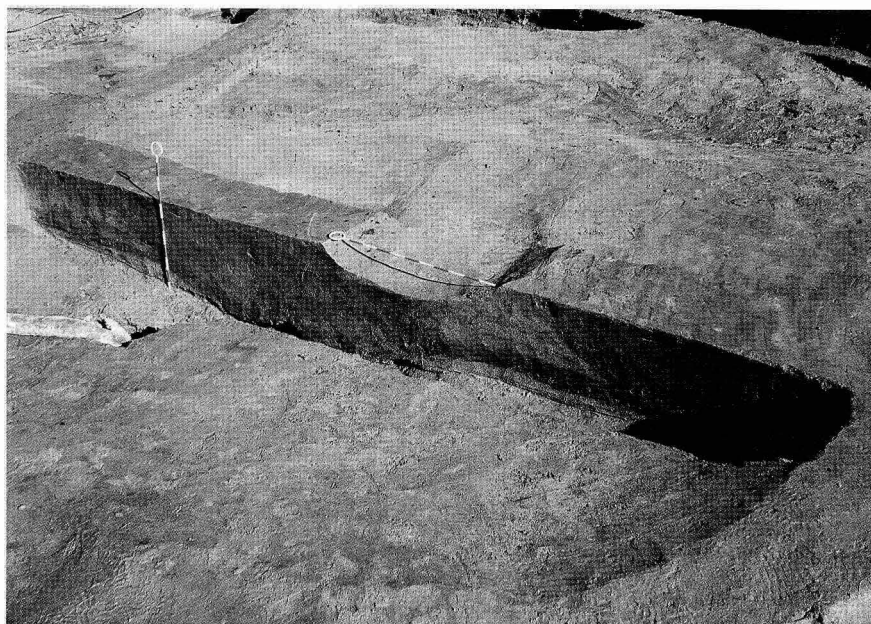
SE318埋土状況  
(南東から)



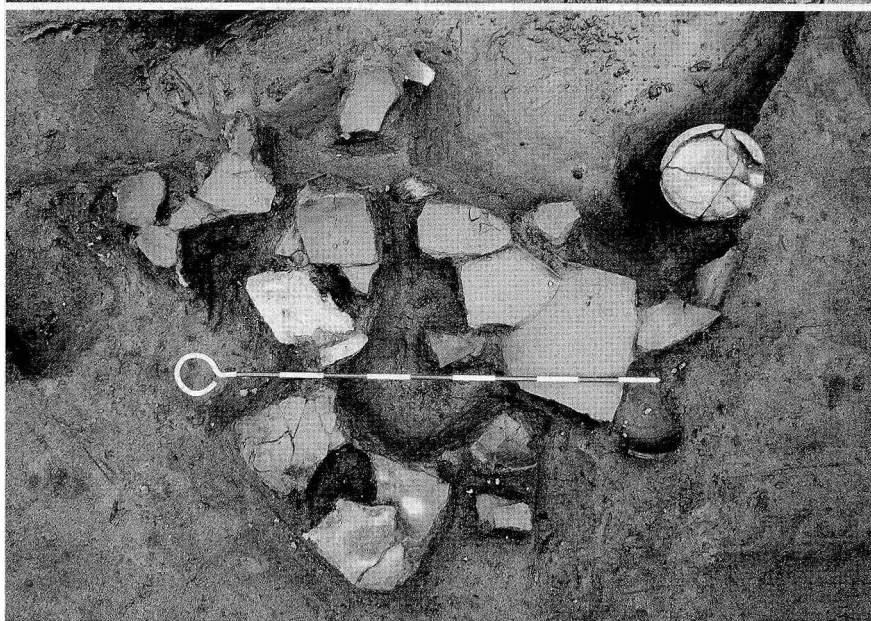
SE318遺物出土状況  
(西から)



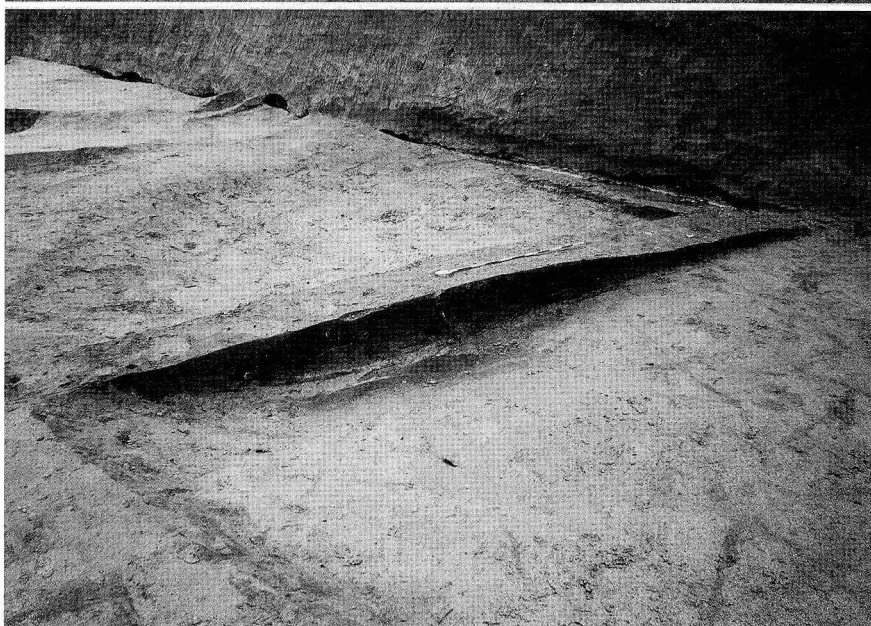
SK319・320  
（南西から）



SK321遺物出土状況  
（南から）



SK322検出状況  
（南東から）





第9層上面遺構群  
(西から)



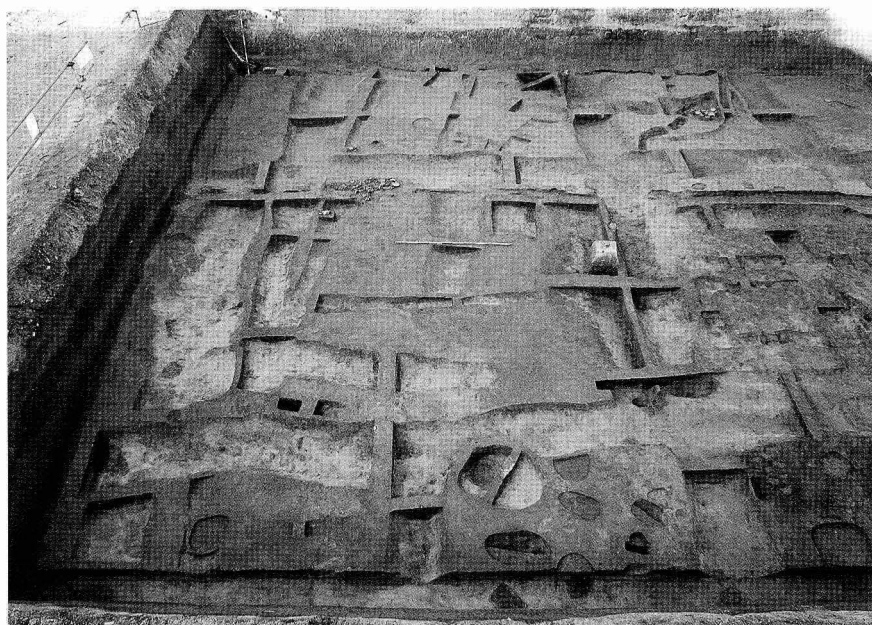
第9層上面遺構群  
西部(北から)



第9層上面遺構群  
東部(北西から)



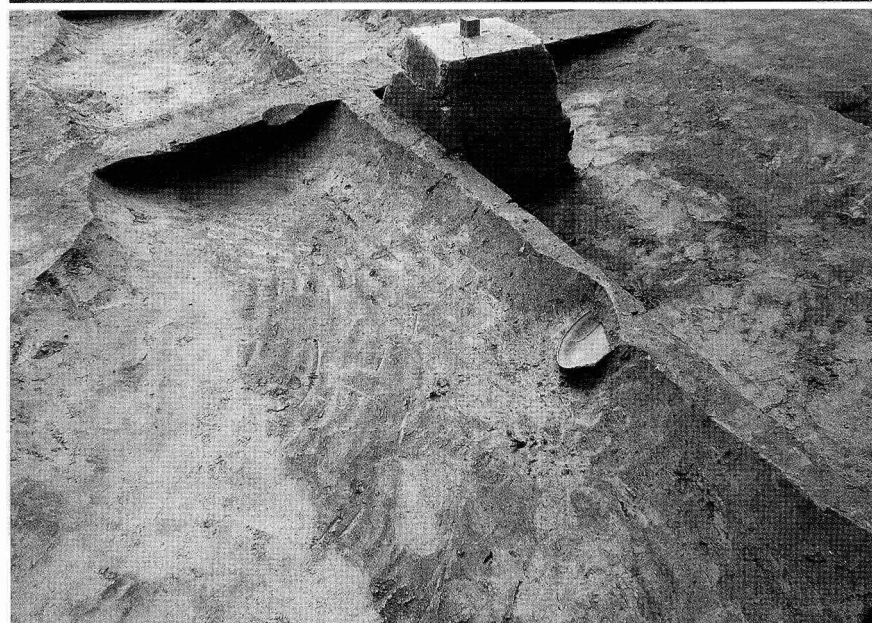
第9層上面遺構群  
西部(南から)



第9層上面遺構群  
南部(北西から)



SD206遺物61出土状況  
(北東から)





SP202(北から)



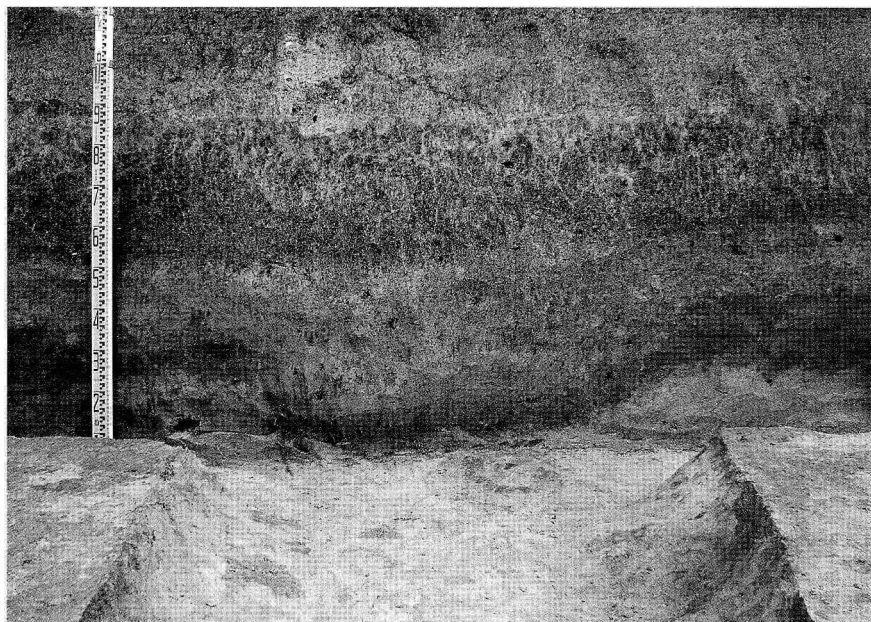
SP203(北から)



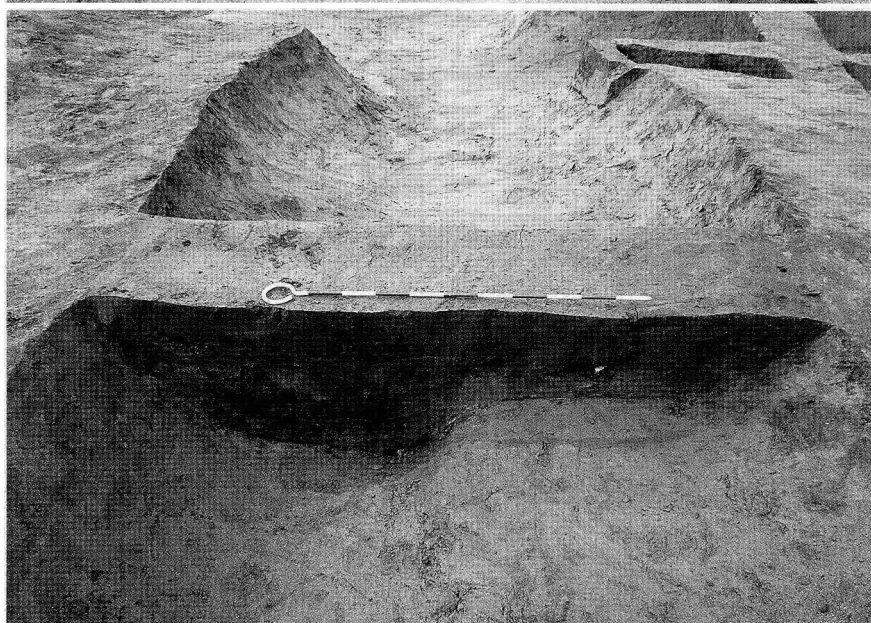
SP204(北から)



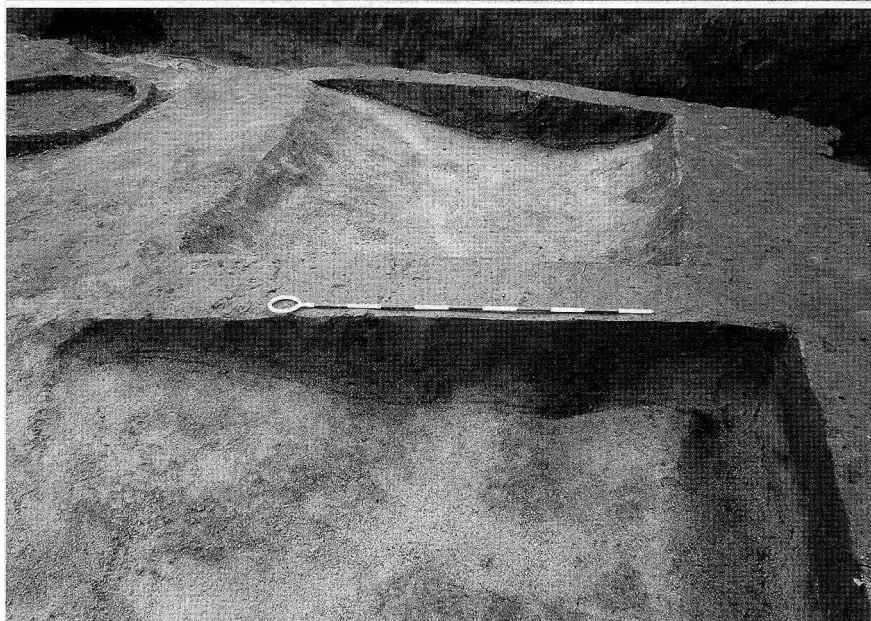
SD206南壁(北から)



SD207(南から)



SD205(北から)





第5層上面水田  
(西から)



第5層上面SR103  
(南東から)

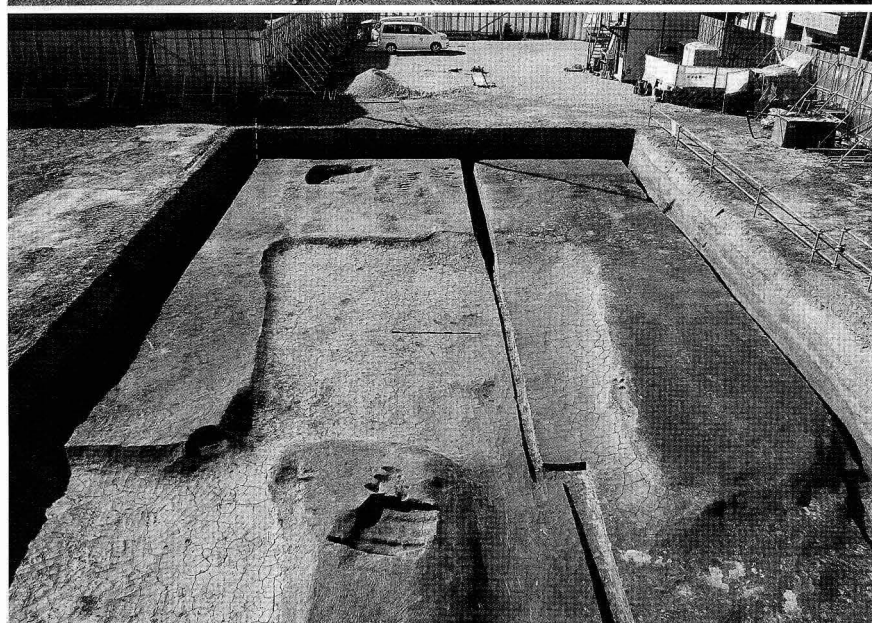


第5層上面SR104  
(南西から)

第4層上面掘上げ田  
(西から)



第4層上面掘上げ田  
(東から)



掘上げ田細部  
(北西から)







SK107(北西から)



NR101(南西から)



NR101(南東から)



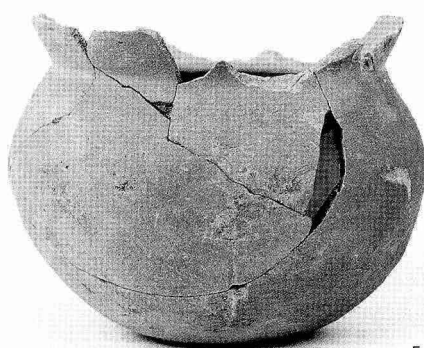
1



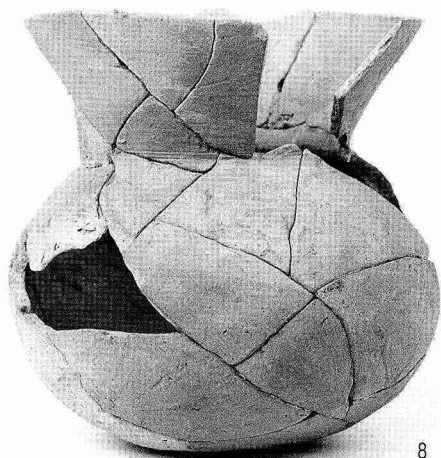
2



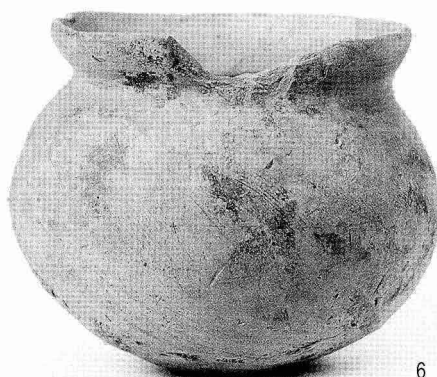
4



5



8



6



10



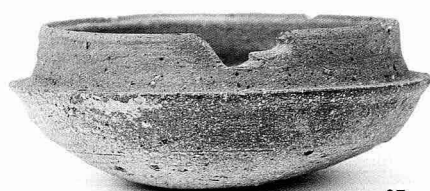
7



22



24



27



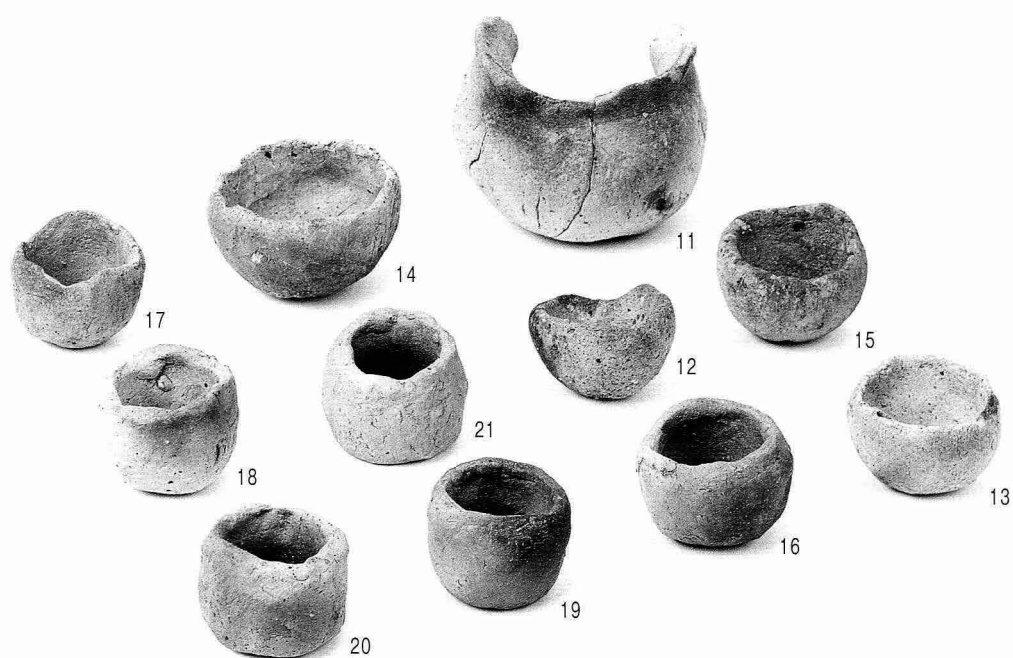
30



28



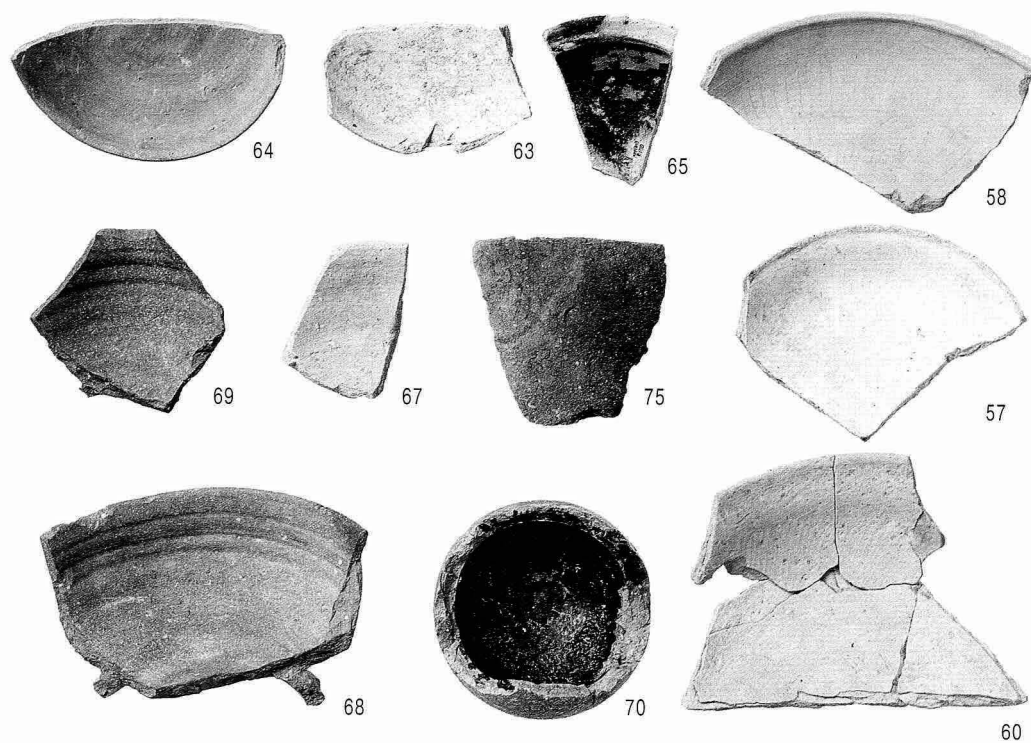
31



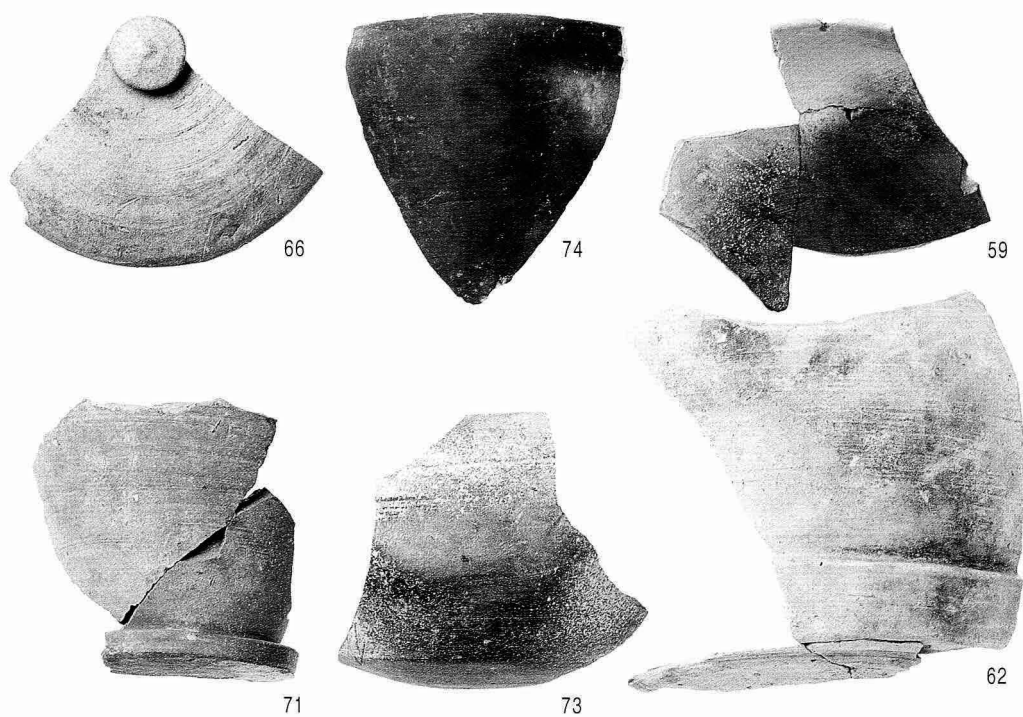




SX317(36・37・44)、SE318(46・47・52)、SK321(56)、SD206(61)、SD208(53・54)、第7層(72)



SD205(63~65・67~69)、SD211(60)、SD218(57)、SD219(58)、  
第7層(75)、第8層(70)



SD205(74)、SD219(59・66)、第7層(62)、第8層(71・73)

大阪市平野区 加美正覚寺遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-064-8

2012年3月9日 発行©

編集・発行 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8





**The Excavation Report  
of  
the Kami-shokakuji Site  
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization  
Osaka City Cultural Properties Association







**The Excavation Report  
of  
the Kami-shokakuji Site  
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization  
Osaka City Cultural Properties Association